

NetBackup™ for MongoDB 管理者ガイド

リリース 11.0

NetBackup™ for MongoDB 管理者ガイド

最終更新日: 2025-04-24

法的通知と登録商標

Copyright © 2025 Cohesity, Inc. All rights reserved.

Cohesity、Veritas、Cohesity ロゴ、Veritas ロゴ、Veritas Alta、Cohesity Alta、NetBackup は、Cohesity, Inc. またはその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

この製品には、Cohesity 社がサードパーティへの帰属を示す必要があるサードパーティ製ソフトウェア（「サードパーティ製プログラム」）が含まれる場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。このCohesity製品に付属するサードパーティの法的通知文書は次の場所で入手できます。

<https://www.veritas.com/about/legal/license-agreements>

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されます。Cohesity, Inc. からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Cohesity, Inc. およびその関連会社は、本書の提供、パフォーマンスまたは使用に関連する付随的または間接的損害に対して、一切責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

ライセンスソフトウェアおよび文書は、FAR 12.212 に定義される商用コンピュータソフトウェアと見なされ、Cohesityがオンプレミスまたはホスト型サービスとして提供するかを問わず、必要に応じて FAR 52.227-19「商用コンピュータソフトウェア - 制限される権利 (Commercial Computer Software - Restricted Rights)」、DFARS 227.7202「商用コンピュータソフトウェアおよび商用コンピュータソフトウェア文書 (Commercial Computer Software and Commercial Computer Software Documentation)」、およびそれらの後継の規制に定める制限される権利の対象となります。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

Cohesity, Inc.
2625 Augustine Drive
Santa Clara, CA 95054

<http://www.veritas.com>

テクニカルサポート

テクニカルサポートはグローバルにサポートセンターを管理しています。すべてのサポートサービスは、サポート契約と現在のエンタープライズテクニカルサポートポリシーに応じて提供されます。サ

ポート内容およびテクニカルサポートの利用方法に関する情報については、次の Web サイトにアクセスしてください。

<https://www.veritas.com/support>

次の URL で Cohesity Account の情報を管理できます。

<https://my.veritas.com>

現在のサポート契約についてご不明な点がある場合は、次に示すお住まいの地域のサポート契約管理チームに電子メールでお問い合わせください。

世界共通 (日本を除く)

CustomerCare@veritas.com

日本

CustomerCare_Japan@veritas.com

マニュアル

マニュアルの最新バージョンがあることを確認してください。各マニュアルには、2 ページ目に最終更新日が記載されています。最新のマニュアルは、Cohesity の Web サイトで入手できます。

<https://sort.veritas.com/documents>

マニュアルに対するご意見

お客様のご意見は弊社の財産です。改善点のご指摘やマニュアルの誤謬脱漏などの報告をお願いします。その際には、マニュアルのタイトル、バージョン、章タイトル、セクションタイトルも合わせてご報告ください。ご意見は次のアドレスに送信してください。

NB.docs@veritas.com

次の Cohesity コミュニティサイトでマニュアルの情報を参照したり、質問したりすることもできます。

<http://www.veritas.com/community/>

Cohesity Services and Operations Readiness Tools (SORT)

Cohesity SORT (Service and Operations Readiness Tools) は、特定の時間がかかる管理タスクを自動化および簡素化するための情報とツールを提供する Web サイトです。製品によって異なりますが、SORT はインストールとアップグレードの準備、データセンターにおけるリスクの識別、および運用効率の向上を支援します。SORT がお客様の製品に提供できるサービスとツールについては、次のデータシートを参照してください。

https://sort.veritas.com/data/support/SORT_Data_Sheet.pdf

目次

第 1 章	NetBackup を使用した MongoDB の保護の概要	6
	NetBackup を使用したシャード、レプリカセット、スタンドアロン MongoDB クラスタの保護について	6
	NetBackup を使用した MongoDB データの保護	10
	NetBackup for MongoDB の用語	12
	制限事項	13
	MongoDB を保護するための前提条件とベストプラクティス	14
第 2 章	MongoDB Plug-in for NetBackup の前提条件の検証	18
	オペレーティングシステムとプラットフォームの互換性	18
	MongoDB プラグイン構成の前提条件	18
第 3 章	NetBackup for MongoDB の構成	20
	MongoDB 構成ツールについて	20
	mongodb.conf ファイルを手動で作成するための前提条件	22
	mongodb.conf ファイルを使用する MongoDB のためのバックアップオプションの設定	23
	NetBackup プライマリサーバーの許可リストに構成ファイルのパスを含める	30
	MongoDB ノードの RSA 鍵の取得	31
	NetBackup での MongoDB クレデンシャルの追加	32
	クレデンシャル設定ファイルについて	33
	MongoDB クレデンシャルを NetBackup に追加するには	35
	データを保護するための MongoDB 役割について	36
	ホストユーザーの要件	36
	バックアップホストの管理	37
	NetBackup プライマリサーバーの許可リストに NetBackup クライアントを含める	37

第 4 章	NetBackup を使用した MongoDB のバックアップ	39
	MongoDB データのバックアップについて	39
	MongoDB クラスタのバックアップ	41
	MongoDB クラスタをバックアップするための前提条件	41
	MongoDB プラグイン用の NetBackup ポリシーの構成	43
	Web UI を使用した、MongoDB クラスタ用 BigData バックアップポリシーの作成	43
第 5 章	NetBackup を使用した MongoDB データのリストアまたはリカバリ	45
	MongoDB データのリストアについて	45
	MongoDB のリストアおよびリカバリの前提条件	46
	同じクラスタへの MongoDB データのリストア	48
	代替クラスタへの MongoDB データのリストア	49
	高可用性の設定にある MongoDB データの代替クライアントへのリストア	53
	リカバリプロセス後の手動の手順	53
第 6 章	トラブルシューティング	55
	NetBackup for MongoDB のデバッグログについて	55
	NetBackup を使用した MongoDB の保護に関する既知の制限事項	56
付録 A	追加情報	69
	MongoDB のクレデンシャルを追加および更新するための MongoDB 構成ユーティリティのサンプルワークフロー	69

NetBackup を使用した MongoDB の保護の概要

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup を使用したシャード、レプリカセット、スタンドアロン MongoDB クラスタの保護について](#)
- [NetBackup を使用した MongoDB データの保護](#)
- [NetBackup for MongoDB の用語](#)
- [制限事項](#)
- [MongoDB を保護するための前提条件とベストプラクティス](#)

NetBackup を使用したシャード、レプリカセット、スタンドアロン MongoDB クラスタの保護について

NetBackup は、次の MongoDB 設定の保護をサポートします。

- シャード MongoDB クラスタ
- レプリカセットの MongoDB クラスタ
- レプリカセットなしのスタンドアロンの MongoDB クラスタ

NetBackup を使用したシャード、レプリカセット、スタンドアロン MongoDB クラスタの保護

MongoDB 用 NetBackup プラグインを使用して、次のおおまかな手順に従ってシャード（設定サーバーとシャードを備えた MongoDB クラスタ）、レプリカセット、またはスタンドアロン MongoDB クラスタを保護します。

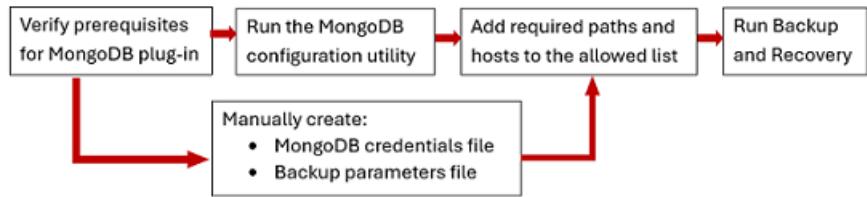


表 1-1 NetBackupを使用したシャード、レプリカセット、スタンドアロンMongoDBクラスタの保護

手順の概要	詳細
NetBackupを使用してMongoDBを保護します。	<p>MongoDBを保護するための全体的な手順として、次のようにする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ NetBackup プライマリサーバー ■ NetBackup メディアサーバー ■ バックアップホスト (NetBackup メディアサーバーまたは NetBackup クライアント) <p>サポートされているプライマリサーバーとメディアサーバーの構成については、NetBackupの互換性リストを参照してください。バックアップホスト (NetBackup メディアサーバーまたは NetBackup クライアント) は、RHEL または SUSE ホストでのみサポートされます。</p> <p>Flex Applianceを含むNetBackup Applianceは、NetBackup プライマリサーバーおよびメディアサーバーとして、またはバックアップホストとして動作するクライアントとしてもサポートされます。</p> <p>保護の概要とベストプラクティス入手するには、次のトピックを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ p.10の「NetBackupを使用したMongoDBデータの保護」を参照してください。 ■ p.12の「NetBackup for MongoDBの用語」を参照してください。 ■ p.14の「MongoDBを保護するための前提条件とベストプラクティス」を参照してください。
MongoDBプラグインの前提条件を検証します。	<p>プラグインを使用する前に、次のトピックを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ p.18の「オペレーティングシステムとプラットフォームの互換性」を参照してください。 ■ p.18の「MongoDBプラグイン構成の前提条件」を参照してください。

手順の概要	詳細
MongoDB 構成ツールを実行します。	<p>MongoDB 構成ツールを実行して、次のファイルを自動的に生成します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ MongoDB クラスタトポロジークレデンシャルのファイル。■ MongoDB クラスタのグローバル NetBackup パラメータを構成する MongoDB 構成ファイル。 <p>NetBackup プライマリサーバーの <code>tpconfig</code> コマンドラインを使用して、MongoDB 構成ツールにアクセスできます。<code>tpconfig</code> コマンドにアクセスするためのパスは、UNIX の場合 <code>/usr/openv/volmgr/bin/</code> で、Windows の場合 <code><install_path>\Volmgr\bin</code> です。</p> <p>詳しくは p.20 の 「MongoDB 構成ツールについて」 を参照してください。</p>

手順の概要	詳細
MongoDB プラグイン、および NetBackup と MongoDB 間の通信を構成します。 メモ: MongoDB 構成ツールを使用する場合、いくつかの構成手順は必要ありません。	<p>NetBackup のバックアップオプションを設定するために、<code>mongodb.conf</code> ファイルを作成します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ p.22 の「mongodb.conf ファイルを手動で作成するための前提条件」を参照してください。■ p.23 の「mongodb.conf ファイルを使用する MongoDB のためのバックアップオプションの設定」を参照してください。■ p.30 の「NetBackup プライマリサーバーの許可リストに構成ファイルのパスを含める」を参照してください。 <p>メモ: MongoDB 構成ツールを使用する場合、これらの手順は必要ありません。</p>
	<p>NetBackup に MongoDB のクレデンシャルを追加するために、MongoDB ノードの RSA 鍵を取得します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ p.31 の「MongoDB ノードの RSA 鍵の取得」を参照してください。 <p>メモ: MongoDB 構成ツールを使用する場合、これらの手順は必要ありません。</p>
	<p>NetBackup に MongoDB のクレデンシャルを追加すると、通信が容易になります。</p> <ul style="list-style-type: none">■ p.32 の「NetBackup での MongoDB クレデンシャルの追加」を参照してください。■ p.33 の「クレデンシャル設定ファイルについて」を参照してください。■ p.35 の「MongoDB クレデンシャルを NetBackup に追加するには」を参照してください。 <p>メモ: MongoDB 構成ツールを使用する場合、これらの手順は必要ありません。</p>
	<p>MongoDB で NetBackup ユーザーに適切な権限を付与します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ p.36 の「データを保護するための MongoDB 役割について」を参照してください。 <p><code>root</code> 以外のユーザーまたは <code>root</code> の権限を持たないユーザーをホストユーザーとして使用するには、次の手順を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ p.36 の「ホストユーザーの要件」を参照してください。 <p>バックアップホストを特定し、構成します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ p.37 の「バックアップホストの管理」を参照してください。■ NetBackup クライアントをバックアップホストとして使用するには、プライマリサーバー上の NetBackup クライアントを許可リストに追加します。 <p>p.37 の「NetBackup プライマリサーバーの許可リストに NetBackup クライアントを含める」を参照してください。</p>

手順の概要	詳細
NetBackup を使用して MongoDB データベースをバックアップします。	<p>バックアップ処理の概要:</p> <ul style="list-style-type: none">■ p.39 の「MongoDB データのバックアップについて」を参照してください。■ p.41 の「MongoDB クラスタのバックアップ」を参照してください。 <p>MongoDB データベースをバックアップするための前提条件またはベストプラクティスは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">■ p.41 の「MongoDB クラスタをバックアップするための前提条件」を参照してください。■ p.43 の「Web UI を使用した、MongoDB クラスタ用 BigData バックアップポリシーの作成」を参照してください。
MongoDB データベースをリストアおよびリカバリします。	<p>リストアとリカバリプロセスの概要は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">■ p.45 の「MongoDB データのリストアについて」を参照してください。 <p>MongoDB データベースをバックアップするための前提条件またはベストプラクティスは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">■ p.46 の「MongoDB のリストアおよびリカバリの前提条件」を参照してください。■ Web UI を使用したリストアおよびリカバリは次のとおりです。<ul style="list-style-type: none">■ p.48 の「同じクラスタへの MongoDB データのリストア」を参照してください。■ p.49 の「代替クラスタへの MongoDB データのリストア」を参照してください。

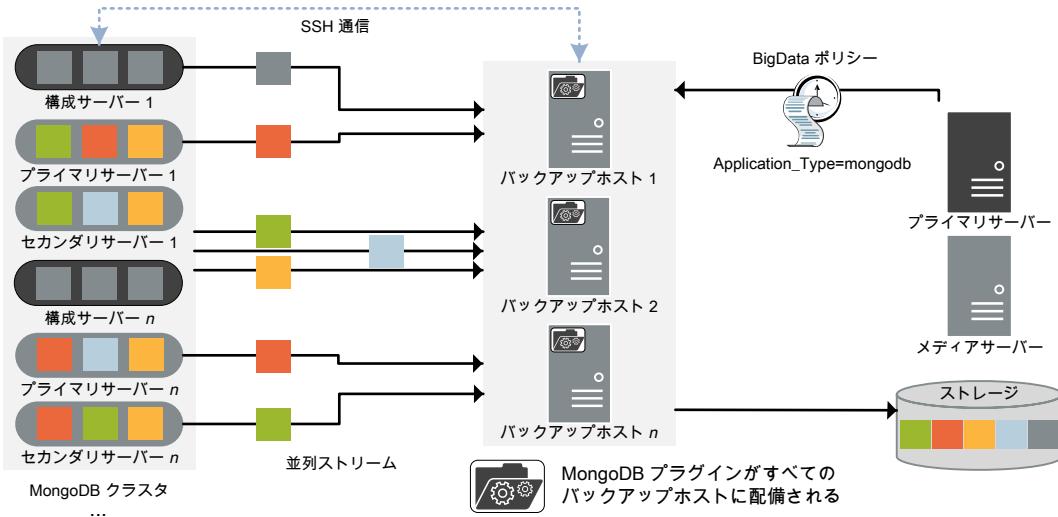
NetBackup を使用した MongoDB データの保護

NetBackup の並列ストリームフレームワーク (PSF) を使用した場合、NetBackup を使用して MongoDB データを保護できるようになりました。

次の図は、NetBackup によって MongoDB データを保護する方法の概要を示しています。

用語の定義も確認してください。p.12 の「[NetBackup for MongoDB の用語](#)」を参照してください。

図1-1 アーキテクチャの概要



図では次の内容を説明しています。

- データは並列ストリームでバックアップされ、バックアップ時にデータノードはデータロックを同時に複数のバックアップホストに対してストリームします。ジョブの処理速度が、複数のバックアップホストと並列ストリームによって向上します。
- MongoDBクラスタとNetBackup間の通信は、MongoDBのNetBackupプラグインを使用して有効になります。
- NetBackup通信の場合、BigDataポリシーを構成し、関連するバックアップホストを追加する必要があります。
- NetBackupのメディアサーバー、クライアント、またはプライマリサーバーをバックアップホストとして構成できます。また、レプリカセットまたはシャードの数によっては、バックアップホストを追加または削除できます。バックアップホストをさらに追加することで使用環境の規模を簡単に拡大できます。
- 設定サーバー、セカンダリノード、バックアップホスト間の通信は、SSHを介して行われます。
- NetBackup並列ストリームフレームワークにより、シンクライアントベースのエージェントレスのバックアップが可能で、バックアップとリストア操作はバックアップホストで実行します。NetBackupシンクライアントバイナリは、バックアップおよびリカバリ操作中に、MongoDBクラスタノードに自動的にプッシュされます。このシンクライアントは、バックアップおよびリカバリ操作が完了した後に自動的に削除されます。クラスタノード上にエージェント管理は必要ありません。また、NetBackupはMongoDBクラスタのアップグレードやメンテナンスの影響を受けません。

詳細情報:

- p.39の「MongoDBデータのバックアップについて」を参照してください。
- p.45の「MongoDBデータのリストアについて」を参照してください。
- p.13の「制限事項」を参照してください。
- NetBackup並列ストリームフレームワーク(PSF)については、『NetBackup管理者ガイドVol. 1』を参照してください。

NetBackup for MongoDBの用語

次の表では、MongoDBクラスタの保護にNetBackupを使用するときに使用される用語を定義しています。

表 1-2 NetBackup の用語

用語	定義
複合ジョブ	<p>MongoDBデータのバックアップジョブは複合ジョブです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ バックアップジョブは、バックアップするデータの情報を取得するための検出ジョブを実行します。 ■ 子ジョブは、実際のデータ転送を実行する各バックアップホストに対して作成されます。 ■ バックアップが完了すると、ジョブはバックアップノード上のスナップショットをクリーンアップし、シンクライアントを削除して、完了したというマークが付けられます。
検出ジョブ	<p>バックアップジョブを実行すると、最初に検出ジョブが作成されます。検出ジョブは構成サーバーと通信し、バックアップする必要があるシャードの情報を、関連するノードの情報を収集します。</p> <p>検出の最後に、ジョブは作業負荷検出ファイルにデータを入力します。ファイルはその後NetBackupによってバックアップホスト間で作業負荷を分散させるために使用されます。</p>
子ジョブ	<p>バックアップの場合、ストレージメディアにデータを転送するバックアップホストごとに個別の子ジョブが作成されます。子ジョブは、複数のセカンダリノードからデータブロックを転送できます。</p>
作業負荷検出ファイル	<p>検出時のバックアップホストが構成サーバーと通信するときに、作業負荷検出ファイルが作成されます。このファイルには、バックアップするデータファイルと、関連付けられているデータノードについての情報が含まれています。</p>
作業負荷分散ファイル	<p>検出が完了すると、NetBackupはバックアップホストごとに作業負荷配布ファイルを作成します。これらのファイルには、それぞれのバックアップホストでバックアップされるデータの情報が含まれます。</p>
並列ストリーム	<p>NetBackup並列ストリームフレームワークにより、複数のセカンダリノードからのデータブロックを、複数のバックアップホストを同時に使用してバックアップできます。</p>

用語	定義
バックアップホスト	バックアップホストは、プロキシクライアントとして機能します。すべてのバックアップとリストア操作は、バックアップホストで実行されます。 メディアサーバー、クライアント、またはプライマリサーバーを、バックアップホストとして構成できます。 バックアップホストは、リストア中に宛先クライアントとしても使用されます。
BigData ポリシー	BigData ポリシーは以下を実行するために導入されました。 <ul style="list-style-type: none"> ■ アプリケーションの種類を指定します。 ■ 分散マルチノード環境のバックアップを可能にします。 ■ バックアップホストを関連付けます。 ■ 作業負荷分散を実行します。
アプリケーションサーバー	<ul style="list-style-type: none"> ■ シャード MongoDB クラスタ: アプリケーションサーバーは、MongoDB プライマリ構成サーバーです。 ■ レプリカセットの MongoDB クラスタ: アプリケーションサーバーは、MongoDB のプライマリノードです。 ■ スタンドアロンクラスタ: アプリケーションサーバーはスタンドアロンノードです。
プライマリ構成サーバー	高可用性シナリオでは、プライマリ構成サーバーは、構成サーバーのレプリカセットのプライマリ役割で実行される MongoDB インスタンスです。プライマリ構成サーバーには、同じホスト上で 1 つ以上の関連付けられた mongos サービスが実行されている必要があります。
フェールオーバー構成サーバー	高可用性シナリオでは、mongodb.conf ファイルに alternate_config_server として指定されているプライマリ構成サーバー以外の構成サーバーは、フェールオーバー構成サーバーとして参照されます。

制限事項

MongoDB プラグインを配備する前に、次の制限事項を検討します。

- 高可用性 MongoDB クラスタでは、バックアップ中にフェールオーバーが発生すると、ジョブは失敗します。
- アプリケーションサーバーとバックアップホストフィールドに対し、IP アドレスはサポートされません。アプリケーションサーバーまたはバックアップホストの FQDN、ホスト名、または短縮名を入力する必要があります。
- 暗号化された MongoDB 環境はサポートされません。
- 英語のみの MongoDB 環境はサポートされます。
- 拡張アクセス制御リスト (ACL) は、リカバリ操作後にはリカバリされません。

- 縮小された MongoDB クラスタでは、リカバリはサポートされません。
- レプリカセットなしのスタンダードアロンの MongoDB ノードでは、増分バックアップはサポートされません。
- MongoDB Ops Manager を使用して配備または管理されている MongoDB 環境の保護はサポートされません。
- 完全バックアップと差分増分バックアップ間で機能の互換性のバージョンを変更すると、バックアップは失敗します。
- シャード MongoDB 環境のバックアップは、レプリカセットやその他のバックアップ構成ではなく、シャードバックアップ構成としてのみ作成できます。

MongoDBを保護するための前提条件とベストプラクティス

前提条件

- シャード MongoDB クラスタの場合、mongos プロセスと mongod プロセスは、バックアップポリシーでクライアントとして指定されたアプリケーションサーバーで実行する必要があります。
- RHEL および SUSE プラットフォームのみが、バックアップホストのサポート対象です。
- MongoDB 用 NetBackup プラグインには、NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、およびバックアップホストで NetBackup バージョン 8.2 以降が必要です。
- NetBackup が、使用している MongoDB バージョンをサポートしていることを確認します。詳しくは、ソフトウェア互換性リストを参照してください。
- NetBackup は、RHEL、SUSE、Linux-s390x、IBMzSeriesRedHat オペレーティングシステムに構成またはインストールされている MongoDB クラスタをサポートします。
- NetBackup は、次の MongoDB 構成をサポートします。
 - シャード MongoDB クラスタ (設定サーバーとシャードを使用した MongoDB クラスタ)
 - レプリカセットの MongoDB クラスタ
 - レプリカセットなしのスタンダードアロンの MongoDB
- NetBackup は、MongoDB に対して次の認証形式をサポートします。
 - 認証なし
 - 単純認証

- 証明書ベースの認証
- NetBackupは、バックアップおよびリストアで次のファイルシステムをサポートします。
 - XFS
 - ext4
- すべてのMongoDBノードにOpenSSHパッケージをインストールします。すべてのMongoDBノードでSSHを有効にします。
- NetBackupは、WiredTigerストレージエンジンで構成されているMongoDBクラスタをサポートします。
- NetBackupは、.tarファイルを使用してローカルに設定またはインストールされた、またはMongoDB公式リポジトリを使用してインストールされたMongoDBクラスタを保護します。
- NetBackupは、完全バックアップとともに、MongoDBの差分増分バックアップをサポートします。累積増分バックアップは現在サポートされていません。
- NetBackupでは、バックアップの高可用性をサポートするために、シャードMongoDB環境に少なくとも3つの設定サーバーを構成することをお勧めします。
- MongoDBアプリケーションも備えたサーバーには、MongoDBプラグインをインストールしないでください。MongoDBアプリケーションを備えたサーバーは、バックアップホストとして使用できません。
- MongoDBサーバーとバックアップホストのローカル時刻がNTPサーバーと同期していることを確認します。
- シャードMongoDBクラスタの場合、クエリルーター役割が構成サーバーに存在する必要があります。
- SUSEオペレーティングシステムを備えたMongoDBクラスタの場合、すべてのMongoDBノードで、/etc/ssh/sshd_configファイルのPasswordAuthenticationフィールドをYesに設定します。
ファイルを更新したら、sshdを再起動します。
すべてのクラスタで、同じハッシュキーアルゴリズム(RSA)がサポートされることを確認します。
- MongoDBクラスタがmongodアカウントで実行されている場合は、root以外のsudoerアカウントが必要です。tpconfigファイルのホストユーザーの場合も同じようにアカウントを構成する必要があります。
- MongoDBクラスタがroot以外またはrootアカウントで実行されている場合、tpconfigコマンドを使用して構成されたホストユーザークレデンシャルが、MongoDBクラスタの構成に使用されたホストユーザーアカウント(rootまたはroot以外のMongoDBデータモンのホストユーザーアカウント)であることを確認します。
詳しくは、p.36の「[ホストユーザーの要件](#)」を参照してください。

MongoDBとNetBackup間の通信に関するベストプラクティス

- NetBackup クライアントをバックアップホストとして使用する場合は、NetBackup プラグイマリサーバーの `bp.conf` ファイルに次の値を追加します。
`APP_PROXY_SERVER=NBUS_CLIENT_FQDN`
- MongoDB ホストユーザーに `root` 権限がない場合は、ユーザーがシンクライアント (`mongodb`)、ログ、スナップショットなどをコピーするためのすべての一時パスにアクセスできることを確認します。オペレーティングシステムの `sudoers` ファイルに `root` 以外のユーザーを追加します。
- `.tar` ファイルを使用する、またはデフォルト以外の場所に MongoDB をインストールする場合は、CLI から MongoDB コマンドを実行できるように、オペレーティングシステムの `bashrc` ファイルに MongoDB `bin` フォルダのパスを追加します。
- MongoDB サーバーが SUSE 12.3 オペレーティングシステムを使用している場合は、`--host <FQDN>` オプションを使用して、`mongod` と `mongos` プロセスに接続できることを確認します。詳しくは、『MongoDB 管理者ガイド』を参照してください。
- `-host_password` オプションを `tpconfig` コマンドと `mongodb.confHostPassword` と併用する場合、パスワードが次を満たすことを確認します。
 - 63 文字を超えていない
 - 次の英数字を 1 文字以上含む: `a-z`, `A-z`, `0-9`
 - 次の文字を 1 文字以上含む: `-` (ハイフン), `_` (アンダースコア), `,` (カンマ), `.` (ピリオド), `?` (疑問符)
- ログ、シンクライアント (`mongodb`)、スナップショット、またはその他のすべてに対するパスを `mongodb.conf` ファイル内で定義するときは、クレデンシャルファイルのホストユーザーが、これらのパスにアクセスするための有効な権限を持っていることを確認します。
- SSH を有効にするには、`sudoers` ファイルに次のエントリを追加します。
`Default <host_user> !requiretty`

NetBackupを使用したMongoDBを保護するためのベストプラクティス

- MongoDB の制限としきい値が、正式な MongoDB のガイドラインに従っていることを確認します。
- ポリシーの構成中、および `mongodb.conf` ファイル内で、ホスト名が `tpconfig` コマンドで一貫して使用されることを確認します。たとえば、`FQDN` を使用する場合、すべてのホスト名インスタンスに対し、短縮名でなく `FQDN` を使用します。
- MongoDB 環境で使用され、`db.hostInfo()` コマンドを使用して検証されたホスト名と `application_server` が一致することを確認します。

たとえば、`db.hostInfo()` によって表示されるホスト名の値は次のようになります。

```
"hostname" : "<hostname_value>:<port>"
```

- バックアップジョブまたはリストアジョブを実行する前に、`mongodb.conf` ファイル内に JSON 形式のエラーまたはタイプミスがないことを確認します。
- `mongod.conf` ファイル内に追加され、`tpconfig` コマンドと併用されるセキュリティ証明書のパスが、すべての MongoDB ノードで同じであることを確認します。
- 単純認証の場合、すべての MongoDB ノードに対し、管理データベースからのルートグループに属する同じユーザーを構成します。
- `mongod.conf` ファイルまたは `mongos.conf` ファイルを使用して MongoDB プロセスを開始する場合は、MongoDB クラスタの絶対システムパスを使用して、`mongod` ファイルを実行します。たとえば、次のようなコマンドを使用します。

```
mongod --config /home/user1/mongod.conf
```

- NetBackupでは、MongoDBインスタンスの構成を変更した後に完全バックアップを実行することをお勧めします。構成を変更した後に増分バックアップを実行するようにスケジュールされている場合は、増分バックアップの前に完全バックアップを手動で実行します。

たとえば、MongoDBの機能の互換性のバージョン(FCV)、MongoDBのバージョン、認証形式、トポロジー(新しいシャードの追加または既存のシャードの削除)、ストレージパラメータなどを変更した場合は、完全バックアップを実行します。

MongoDB Plug-in for NetBackup の前提条件の検証

この章では以下の項目について説明しています。

- [オペレーティングシステムとプラットフォームの互換性](#)
- [MongoDB プラグイン構成の前提条件](#)

オペレーティングシステムとプラットフォームの互換性

このリリースでは、RHEL と SUSE とともに、新しいプラットフォーム Linux-s390x、IBMzSeriesRedHat も MongoDB クラスタでサポートされます。

メモ: RHEL および SUSE プラットフォームのみが、バックアップホストのサポート対象です。

また、このリリース NetBackup では MongoDB 5.0 のバックアップとリストアもサポートされます。

詳しくは、次を参照してください。

- [NetBackup Database and Application Agent Compatibility List](#)
- [NetBackup Master Compatibility List](#)

MongoDB プラグイン構成の前提条件

NetBackup を MongoDB 用に構成するには、次の点を考慮してください。

前提条件:

- `vxupdate_nb_version` SJA の一部である MongoDB シンクライアントパッケージを NetBackup プライマリサーバーのパッケージリポジトリに追加します。

メモ: 必要なパッケージは、バックアップホストの NetBackup バージョンおよび MongoDB ホストのオペレーティングシステムと対応している必要があります。

パッケージを追加するには、NetBackup プライマリサーバー上で `nbrepo` コマンドを実行します。

```
./nbrepo -add vxupdate_nb_version_suse_x64.sja  
./nbrepo -add vxupdate_nb_version_redhat_x64.sja  
./nbrepo -add vxupdate_nbclient_version_redhat_zseries.sja
```

CentOS オペレーティングシステムを搭載した MongoDB ホストの場合は、バックアップホストの NetBackup バージョンの Linux RHEL VxUpdate パッケージを NetBackup プライマリサーバーのパッケージリポジトリに追加します。

メモ: パッケージが追加されていない場合、MongoDB バックアップはエラー 6729 「パッケージリポジトリからシンクライアントをダウンロードできません。(Unable to download the thin client from the package repository.)」で失敗することがあります。

- バックアップホスト、メディアサーバー、プライマリサーバーのホスト名に、一貫性がある表記規則を使用します。たとえば、`MongoDB.veritas.com` というホスト名 (FQDN 形式)を使用している場合は、特に `tpconfig` コマンドの実行中、他のすべての場所で同じ形式を使用します。
- バックアップホストがすべての MongoDB ノードと通信できることを確認します。
- MongoDB ホストの `mongod` インスタンスの構成ファイルにある `bindIp` 設定の値が `0.0.0.0` であることを確認します。

ベストプラクティス:

- MongoDB クラスタのすべてのノードのエントリを、すべてのバックアップホスト上の `/etc/hosts` ファイルに追加します。FQDN 形式でホスト名を追加する必要があります。
または
`/etc/resolv.conf` ファイルに適切な DNS エントリを追加します。

NetBackup for MongoDB の構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [MongoDB 構成ツールについて](#)
- [mongodb.conf ファイルを手動で作成するための前提条件](#)
- [mongodb.conf ファイルを使用する MongoDB のためのバックアップオプションの設定](#)
- [MongoDB ノードの RSA 鍵の取得](#)
- [NetBackup での MongoDB クレデンシャルの追加](#)
- [ホストユーザーの要件](#)
- [バックアップホストの管理](#)

MongoDB 構成ツールについて

NetBackup は、MongoDB を保護するために必要な情報を正確にキャプチャして更新できるようにする、コマンドラインの構成ツールを提供します。

MongoDB 構成ツールを実行して、次のファイルを自動的に生成できます。

- NetBackup の MongoDB クラスタトポジーとクレデンシャルを構成するクレデンシャルファイル。
クレデンシャル設定ファイルとそれを手動で作成する方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。
[p.32 の「NetBackup での MongoDB クレデンシャルの追加」](#)を参照してください。
- MongoDB クラスタのグローバル NetBackup パラメータを構成する MongoDB 構成ファイル。

MongoDB 設定ファイルとそれを手動で作成する方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。

[p.23 の「mongodb.conf ファイルを使用する MongoDB のためのバックアップオプションの設定」](#) を参照してください。

メモ: 2 つのファイルを手動で作成できますが、形式とパラメータが正しいことを確認する必要があります。

NetBackup プライマリサーバーの tpconfig コマンドラインを使用して、MongoDB 構成ツールにアクセスできます。tpconfig コマンドにアクセスするためのパスは /usr/openv/volmgr/bin/ です。

- Windows プライマリサーバーで、tpconfig -mongo_configuration コマンドを実行して Mongo 設定インターフェースを有効にします。
- Linux および Solaris プライマリサーバーで、./tpconfig と tpconfig を実行し、MongoDB 構成の 4 番目のオプションを選択します。

[p.69 の「MongoDB のクレデンシャルを追加および更新するための MongoDB 構成ユーティリティのサンプルワークフロー」](#) を参照してください。

tpconfig コマンドについて詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

mongodb.conf ファイルパスを、bp.conf 内で bpcd_allowed_path オプションを使用して許可リストに追加します。詳しくは、[p.30 の「NetBackup プライマリサーバーの許可リストに構成ファイルのパスを含める」](#) を参照してください。

代替 MongoDB クラスタへのリカバリ時の MongoDB クレデンシャルの追加

代替の MongoDB クラスタにリカバリするには、構成ツールを使用して、既存のクラスタのクレデンシャルに代替クラスタのクレデンシャルを追加します。

シャード MongoDB クラスタ

1. 構成ツールを使用して、既存のクラスタのクレデンシャルを更新します。
2. [新しいセカンダリ構成サーバーを追加します (Add new secondary config server)] を使用して新しい構成サーバーを追加し、保存します。
3. [新しいシャードホストサーバーを追加します (Add new shard host server)] オプションを使用して新しいクラスタのシャードを追加し、保存します。
4. 代替リカバリジョブを開始します。

レプリカセットの MongoDB

1. 構成ツールを使用して、既存のレプリカセットのクレデンシャルを更新します。

2. [セカンダリ構成サーバーを追加します (Add secondary server)] オプションを使用して新しいプライマリサーバーを追加し、保存します。
3. [セカンダリ構成サーバーを追加します (Add secondary server)] オプションを使用して、すべてのセカンダリサーバーを追加し、保存します。
4. 代替リカバリジョブを開始します。

メモ: クレデンシャルファイルを使用している場合は、ファイルを手動で更新して、tpconfig コマンドを使用してファイルをアップロードできます。

mongodb.conf ファイルを手動で作成するための前提条件

メモ: MongoDB 構成ツールを使用する場合、これらの手動の手順は必要ありません。

- MongoDB クラスタポートとパス用の `mongodb.conf` ファイルに値を指定せず、シンクライアントの配備、スナップショットの作成、ログの作成を行う場合、デフォルト値が考慮されます。
- `max_streams` フィールドの最小値は 32 です。`max_streams` が定義されない場合、デフォルト値は、バックアップホストごとに 32 個の並列データストリームになります。`mongodb.conf` ファイル内の `max_streams` フィールドの場合、バックアップホストの値が、`global_default` の値よりも優先されます。たとえば、値 32 は値 34 よりも優先され、このシナリオでは、ジョブはバックアップ中に 32 個のストリームを実行します。

```
"max_streams": {  
    "global_default": 34,  
    "Backup_Host": 32}
```

バックアップストリームは、バックアップポリシーで定義されているバックアップホスト全体に分散されます。ストリームは、`mongodb.conf` ファイルの `max_streams` オプションで定義されているバックアップホストに従って分散されるわけではありません。

- シャード MongoDB 環境の場合、`mongodb.conf` ファイルに最新のプライマリ設定サーバーとセカンダリ設定サーバーがあることを確認します。
- `mongodb.conf` ファイルに記載されたフォルダまたはディレクトリが、MongoDB クラスタで利用可能であることを確認します。たとえば、`snapshot_mount_path`、`oplog_location`、`logdir` などのフォルダまたはディレクトリです。

- 許可リストに mongodb.conf ファイルパスを追加します。bp.conf ファイルで、`bpcd_allowed_path` オプションを使用します。
p.30 の「[NetBackup プライマリサーバーの許可リストに構成ファイルのパスを含める](#)」を参照してください。
- mongodb.conf ファイルで指定されたポートとポート範囲にホストユーザーアクセス権を付与します。

mongodb.conf ファイルを使用する MongoDB のためのバックアップオプションの設定

メモ: MongoDB 構成ツールを使用する場合、これらの手動の手順は必要ありません。

NetBackup はデフォルトのオプションを使用して、MongoDB データをバックアップします。バックアップ操作中に使用するカスタムオプションを指定するには、**UNIX** の場合 `/usr/openv/var/global/` ディレクトリに `mongodb.conf` ファイルを作成し、**Windows** プライマリサーバーの場合 `<Install_Dir>\NetBackup\var\global\` を作成する必要があります。

注意: ファイル名 `mongodb.conf` は大文字と小文字が区別されます。

`mongodb.conf` ファイル内のすべてのオプションを指定する必要はありません。NetBackup はカスタム値が設定されていないオプションに対してデフォルト値を使用します。

`mongodb.conf` ファイルで **JSON** 形式が使用されていることを確認し、ファイルパスを許可リストに追加します。(bp.conf の `bpcd_allowed_path` オプションを使用します。)

p.30 の「[NetBackup プライマリサーバーの許可リストに構成ファイルのパスを含める](#)」を参照してください。

mongodb.conf ファイルのバックアップオプション

次のバックアップオプションとその値を、`mongodb.conf` ファイルで指定できます。

注意: ファイルのオプションでは、大文字と小文字が区別されます。

オプション

application_servers

詳細

プライマリ設定サーバーの完全修飾ドメイン名 (FQDN) またはホスト名、またはその短縮名とポート番号、mongod と mongos ポートを次の形式で指定します。

`clientFQDN_OR_hostname_OR_shortname:portnumber`

`application_server` が、MongoDB 環境で使用され、`db.hostInfo()` コマンドを使用して検証されたホスト名の値と一致することを確認します。

たとえば、`db.hostInfo()` ではホスト名の値は次のように表示されます：

`"hostname" : "<hostname_value>:<port>"`

警告: MongoDB 用のアビターノードとして動作するノードは入力しないでください。

alternate_config_server

セカンダリまたは代替設定サーバーの完全修飾ドメイン名 (FQDN) またはホスト名、またはその短縮名とポート番号。1つのクラスタには、代替設定サーバーを1つだけ追加できます。

値には次の形式を使用します。

`clientFQDN_OR_hostname_OR_shortname:portnumber`

`alternate_config_server` が、MongoDB 環境で使用され、`db.hostInfo()` コマンドを使用して検証されたホスト名の値と一致することを確認します。

たとえば、`db.hostInfo()` ではホスト名の値は次のように表示されます：

`"hostname" : "<hostname_value>:<port>"`

プライマリ設定サーバーへの接続が失敗した場合は、最初の有効な代替設定サーバーが使用されます。

シャード MongoDB クラスタの場合、`mongod` プロセスと `mongos` プロセスの両方が代替構成サーバーで実行される必要があります。

すべての `application_servers` エントリに対して、`alternate_config_server` の値を個別に入力する必要があります。

cleanup_time_in_min

取り消されたジョブのために作成された古いスナップショットまたは `oplogstore` をクリーンアップする時間を分単位で指定できます。

値は、整数で指定する必要があります。

オプション	詳細
free_space_percentage_snapshot	<p>このオプションでは、スナップショットを作成するために使用できるボリュームグループ上の空き領域の割合を指定します。このオプションは完全バックアップの場合にのみ使用されます。</p> <p>デフォルト値(指定されていない場合)は 20% です。値は 0 から 100 の間である必要があります。パーセント記号(%)は使用しないでください。</p> <p>たとえば、vgdisplay コマンドを実行して、"Free PE / Size" フィールドの値を確認します。この free_space_percentage_snapshot 値は、データバスが存在するボリュームグループの Free PE / Size の割合です。</p> <p>バックアップ操作時の MongoDB インスタンスのデータ変更率と、ボリュームグループで利用可能な空き容量に基づいて、free_space_percentage_snapshot 値を調整します。</p> <p>たとえば、次の場面に実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ データ変更率は 250 MB■ ボリュームグループに 1 GB Free PE / Size がある■ データ変更率は空き PE/サイズの 25% <p>この場合、free_space_percentage_snapshot の最小値を 25% として指定します。</p> <p>空き領域スナップショットの割合の値を小さくしすぎると、スナップショット(およびその後のバックアップ)にエラーが発生する可能性があります。</p> <p>空き領域のスナップショットの割合の値を大きくしすぎると、ボリュームグループの利用可能な領域の量が減る可能性があります。</p> <p>一般的な方法について詳しくは lvcreate コマンドについて Linux のマニュアルページを参照してください。</p>
data_channel_tls	<p>このパラメータを使用して、MongoDB クラスタとバックアップホスト間のデータチャネルの暗号化を無効または有効にします。</p> <p>たとえば、"data_channel_tls": false を使用して、データチャネルの暗号化を無効にします。</p> <p>デフォルトでは、NetBackup バックアップホストとシンクライアント(mdbserver)間のすべてのトラフィックが TLS チャネルを介します。シンクライアント(mdbserver)からバックアップホストへのデータ移動に対してこの TLS を無効にして、パフォーマンスを向上させることができます。</p> <p>メモ: このオプションが無効になっている場合でも、クレデンシャルなどの制御データと機密データは TLS チャネルを介して転送されます。</p>
logdir	<p>MongoDB ノードでシンクライアント(mdbserver)ログが生成される場所。</p> <p>デフォルトの場所は /tmp です。ディレクトリパスを指定しても、ディレクトリがサーバー上に存在しない場合は、NetBackup はディレクトリを作成します。</p>

オプション

loglevel

詳細

ログレベルを指定します。

デフォルト値は 3 です。

ログレベルの値については、次のオプションを参照してください。

- ESError = 1
- ESwarn = 2
- EInfo = 3
- EDebug = 4
- ETrace = 5
- ECritical = 6

max_log_mbsize

NetBackup シンクライアントログファイルの最大ファイルサイズを MB 単位で指定します。

デフォルトサイズは 10 MB です。新しいログファイルは毎日作成されるか、既存のログファイルが最大サイズを超える場合に作成されます。ログファイルの作成は進行中のジョブに影響せず、mdbserver によって実行される次のジョブの間にログのロールオーバーが行われます。

ログは 30 日後にクリーンアップされます。

オプション

詳細

max_streams

メモ: このパラメータは、シャード MongoDB クラスタにのみ適用されます。

バックアップホストごとの並列データストリームの数を定義します。最小値は 32 です。

max_streams が定義されない場合、デフォルト値は、バックアップホストごとに 32 個の並列データストリームになります。

mongodb.conf ファイルに次のエントリを追加します。

```
max_streams:  
{  
    "global_default":<set_value>,  
    "<backup_host>":<set_value>  
}
```

ここで示された文字列については、次のとおりです。

- *global_default*
すべてのバックアップホストの並列データストリームのデフォルトの上限。
- *backup_host*
指定したバックアップホストの並列データストリームのデフォルトの上限を設定します。
backup_host は、バックアップポリシーで指定されているものと同じである必要があります。複数のバックアップホストがある場合は、このエントリをすべてのバックアップホストに対して繰り返すことができます。バックアップホストを指定しない場合は、*global_default* 値が使用されます。

メモ: このオプションは、バックアップホストごとの並列データストリームの数の上限を設定します。バックアップジョブまたはリカバリジョブは、利用可能なすべてのストリームは使用しないことがあります。

mdb_progress_loglevel

アクティビティモニターにリストアされたファイルの進捗ログ情報を出力できます。

デフォルト値は 0 (オフ) です。

有効にするには、"mdb_progress_loglevel": 1 を設定します。

メモ: このオプションを有効にすると、リカバリ時間が長くなる可能性があります。

オプション**詳細** **mdbserver_location**

MongoDB バックアップとリストア操作に必要な MongoDB ノードのシンクライアント (mdbserver) バイナリをコピーする場所を指定します。

ファイルは、保護する必要があるデータが含まれているサーバーにコピーされ、バックアップ操作の完了後に削除されます。

ファイルのコピー先のデフォルトの場所は /tmp です。

メモ: ディレクトリの権限で競合が発生する可能性があるため、マウントパスまたは高レベルの Linux ディレクトリは指定しないでください。たとえば、/root、/etc、/usr、/bin、/home などのパスを指定しないでください。

 mdbserver_port

MongoDB ノードで実行されている NetBackup シンクライアント (mdbserver) に接続するためにバックアップホストによって使用されるポート。

デフォルト値は 11000 です。

この値は文字列です。

 mdbserver_port_range

このパラメータは、単一の MongoDB ノードで複数の mongod インスタンスが実行される場合に使用します。

このオプションを使用すると、既存のポートが使用中の場合に、バックアップおよびリストア操作の範囲内で次に利用可能なポートを使用できます。

このオプションを使用すると、複数の NetBackup シンクライアント (mdbserver) を配備して、異なるポートで同時に複数のバックアップジョブを実行できます。

値を "mdbserver_port_range":range_value として入力します。ここで、range_value は利用可能なポート番号の範囲を定義する整数です。たとえば、range_value を 10 として追加し、mdbserver_port が 12000 と定義されている場合、ポート範囲は 12000 から 12009 が使用されます。

デフォルトの値は 10 です。

同時にバックアップされる MongoDB ホスト上の mongod インスタンスの数に基づいて、この値を変更します。

 mdbserver_timeout_min

NetBackup シンクライアント (mdbserver) プロセスが強制終了するまで待機する時間を分単位で定義します。

デフォルト値は 300 (分) です。

バックアップ処理時間に、より長い時間が必要な場合は、300 分より大きい値を設定します。

理想的には、mdbserver はプラグインが終了した後またはバックアップが完了した後に強制終了します。

オプション**詳細**

mongos_port

mongos プロセスが通信に使用するポート。

このパラメータは、シャード MongoDB クラスタの必須のパラメータです。

alternate_config_server または application_servers エントリにそれぞれこの値を指定する必要があります。

この値は文字列です。

oplog_location

差分増分バックアップの場合は、MongoDB oplog ファイルを格納するためのカスタムディレクトリを指定します。

この場所はバックアップイメージに格納されます。

デフォルトの場所は /tmp/oplogstore です。

この場所には、増分バックアップの oplog データ用に十分な空き領域があることを確認します。

snapshot_mount_path

完全バックアップの間に LVM スナップショットをマウントするための MongoDB ノードのパスを指定します。

デフォルトパスは /tmp です。

メモ: MongoDB クレデンシャルファイルで構成した HostUser が、mongodb.conf ファイルに記述されているすべてのパスに対する読み取りおよび書き込み権限を持っていることを確認します。

すべてのオプションを追加しない場合は、不足しているオプションについてのエントリがログに追加されます。デフォルト値が、指定されていないオプションに対して使用され、バックアップ操作が続行されます。

mongodb.conf ファイルの内容の例

```
{
  "application_servers": {
    "FQDN_primary_configuration_server_1:port": {
      "alternate_config_server": [
        {
          "hostname:port": "FQDN_alternate_configuration_server_1:26051",
          "mongos_port": "26051"
        }
      ],
      "mongos_port": "26052"
    },
    "FQDN_primary_configuration_server_2:port": {
      "alternate_config_server": [
        {
          "hostname:port": "FQDN_alternate_configuration_server_2:26052",
          "mongos_port": "26052"
        }
      ],
      "mongos_port": "26053"
    }
  }
}
```

```

    "alternate_config_server": [
        {
            "hostname:port":
                "FQDN_alternate_configuration_server_2:26053",
                "mongos_port": "26053"
        }
    ],
    "mongos_port": "26054"
},
{
    "mdbserver_location": "/path/to/store/mdbserver/",
    "logdir": "/path/to/store/logdir/",
    "mdbserver_port": "21020",
    "loglevel": 5,
    "max_log_mbsize": 4,
    "oplog_location": "/path/to/store/oplog/",
    "free_space_percentage_snapshot": "25",
    "mdb_progress_loglevel": 1,
    "snapshot_mount_path": "/path/to/mount/snapshot/",
    "max_streams":
        {
            "global_default":2,
            "FQDN_backup_host_1":1
        }
}
}

```

NetBackup プライマリサーバーの許可リストに構成ファイルのパスを含める

構成ファイルを作成した後、許可リストに構成ファイルのパスを含める必要があります。この処理によって、バックアップ操作を正常に実行できます。NetBackup プライマリサーバーで許可リストへの追加手順を実行します。

許可リストへの追加は、ソフトウェアまたはアプリケーションが安全な実行を承認されていないかぎり、それらを実行しないようにシステムを制限するセキュリティ手法です。

構成ファイルのパスを許可リストに追加するには:

- 1 NetBackup プライマリサーバーで次のコマンドを実行します。

UNIX の場合:

```
bpsetconfig -h primaryserver_name
bpsetconfig bpcd_allowed_path = /usr/openv/var/global/
```

コマンドラインを終了します。

- 2 Windows の場合:

```
bpsetconfig -h primaryserver_name
bpsetconfig bpcd_allowed_path =
<install_dir>\NetBackup\var\global\
```

コマンドラインを終了します。

bpsetconfig コマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

bpcd_allowed_path について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』の「NetBackup サーバーの構成オプション」セクションを参照してください。

MongoDB ノードの RSA 鍵の取得

MongoDB ホストで次のコマンドを使用して、MongoDB クラスタからのすべての MongoDB ノードに対して SHA256 ベースの RSA を取得します。

```
cat /etc/ssh/ssh_host_rsa_key.pub |awk '{print $2}' |base64 -d |sha256sum |awk '{print $1}'
```

コマンドの出力は RSA 鍵です。

次に例を示します。

```
cat /etc/ssh/ssh_host_rsa_key.pub |awk '{print $2}' |base64 -d |sha256sum |awk '{print $1}'
```

コマンドの出力:

```
b2352722053ac9f40bc1XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX419fa241ba9431fd6b9
```

RSA 指紋をコピーします。MongoDB クレデンシャルを追加するときに、この指紋を指定する必要があります。

NetBackup での MongoDB クレデンシャルの追加

メモ: MongoDB 構成ツールを使用する場合、これらの手動の手順は必要ありません。

正常なバックアップとリストア操作のために MongoDB クラスタと NetBackup の間のシームレスな通信を確立するには、MongoDB のクレデンシャルを NetBackup プライマリサーバーに追加して更新する必要があります。

NetBackup がサポートする MongoDB の認証形式について

NetBackup は、MongoDB データを保護するために次の認証形式をサポートします。

- 認証なし
- 単純 - Salt の SCRAM (Challenge Response Authentication Mechanism)
- 証明書ベース - x.509

`tpconfig` コマンドを使用してクレデンシャルを追加するときには、各認証形式に対して異なるオプションが必要になります。

次の表は、各認証形式に必要なオプションを記述したものです。

表 3-1 認証形式に必要なオプション

オプション	オプションの説明	認証なし	単純認証	証明書ベースの認証
AppUserId	このオプションでは、アプリケーションサーバーにログインするために必要なユーザー名を指定します。	✗	✓	✗
AppUserPassword	このオプションでは、アプリケーションサーバーにログインするために必要なユーザーpasswordを指定します。	✗	✓	✗
HostUser	SSH 実装のためのホストのユーザー ID を指定します。 p.36 の「ホストユーザーの要件」 を参照してください。	✓	✓	✓
HostPassword	SSH 実装のためのホストのユーザー password を指定します。	✓	✓	✓
HostRSAPKey	パスワードなしのリモート操作を実行するには、RSA 鍵が必要です。	✓	✓	✓

オプション	オプションの説明	認証なし	単純認証	証明書ベースの認証
ServerPemPath	MongoDB ノードの PEM 証明書ファイルへのパス。	✗	✗	✓
CAPemPath	MongoDB ノードの CA PEM 証明書ファイルへのパス。	✗	✗	✓
Passkey	CA 証明書のパスワード。	✗	✗	✓
CADir	CA 証明書へのパス。	✗	✗	✓
CARole	CA で定義されているユーザーロール。	✗	✗	✓
CertificateUser	証明書ユーザーの詳細を指定します。	✗	✗	✓
application_server_conf	認証形式、ユーザーの詳細、CA セキュリティ証明書のディレクトリパスを含むクレデンシャル設定ファイルへのパスを指定します。 p.33 の「クレデンシャル設定ファイルについて」 を参照してください。	✓	✓	✓

クレデンシャル設定ファイルについて

認証にはクレデンシャル設定ファイルが必要です。MongoDB ノードのクレデンシャルを追加するときに、このファイルを任意の場所で作成し、パスを使用できます。

バックアップポリシーの[クライアント(Clients)]タブで指定したアプリケーションサーバーに対して `tpconfig` コマンドを使用して、MongoDB ノードのクレデンシャルを追加します。

複数の MongoDB ノードはカンマで区切る必要があります。

- シャード MongoDB クラスタの場合は、すべての `mongod` および `mongos` ポートを次の形式で追加します。

```
mongod_hostname:mongod_port
mongos_hostname:mongos_port
```

- レプリカセット MongoDB クラスタとスタンダロン MongoDB クラスタの場合は、次の形式で `mongod` ポートを追加します。

```
mongod_hostname:mongod_port
```

すべての認証形式が含まれている次のサンプルクレデンシャルファイルを参照してください。

- 認証なし

```
{  
"app.server.com:26050" : {  
    "AuthType": "NOAUTH",  
    "HostUser": "root",  
    "HostPassword": "password",  
    "HostRsaKey": "b2352722053ac9f40bc1XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX419fa241ba9431fd6b9"  
}  
}
```

- 単純認証

```
{  
"app3.server.com:26051" : {  
    "AuthType": "SIMPLEAUTH",  
    "HostUser": "root",  
    "HostPassword": "password",  
    "HostRsaKey": "b2352722053ac9f40bc1XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX419fa241ba9431fd6b9",  
    "AppUserId": "admin",  
    "AppUserPassword": "password"  
}  
}
```

- 証明書ベースの認証

```
{  
"app4.server.com:26052" : {  
    "AuthType": "CERTAUTH",  
    "HostUser": "root",  
    "HostPassword": "password",  
    "HostRsaKey": "b2352722053ac9f40bc1XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX419fa241ba9431fd6b9",  
    "ServerPemPath": "/root/certs/user1.pem",  
    "CAPemPath": "/root/certs/mongo-CA-cert.crt",  
    "Passkey": "password",  
    "CADir": "/root/",  
    "CARole": "root",  
    "CertificateUser": "CN=user1,OU=nbu,O=vtas,L=pune,ST=mh,C=in"  
}  
}
```

MongoDB クレデンシャルを NetBackup に追加するには

`tpconfig` コマンドを使用して、NetBackup プライマリサーバーにクレデンシャルを追加します。

`tpconfig` コマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

`tpconfig` コマンドを実行する前に、MongoDB ノードの以前のすべてのエントリを削除してください。

`tpconfig` コマンドを実行するには、次の手順を実行します。

- 1 次のディレクトリパスから `tpconfig` コマンドを実行します。

UNIX システムでは、`<install_directory>/volmgr/bin/`

Windows システムでは、`<install_path>\volmgr\bin\`

- 2 `tpconfig --help` コマンドを実行します。MongoDB クレデンシャルを追加、更新、および削除するのに必要なオプションのリストが表示されます。

すべての認証形式のクレデンシャルを追加するには、次のようにします。

- 1 次のコマンドを各オプションに適切な値を入力して実行し、MongoDB クレデンシャルを追加します。

```
tpconfig -add -application_server  
app_server_name-mongod_port_number -application_type mongodb  
-requiredport mongod_port_number -application_server_conf  
/<install_directory>/var/global/mongodb_cred_file.conf
```

以下に説明します。

`application_server` が `mongodb_hostname-mongodport` である

`application_server_conf` は MongoDB クラスタごとの单一または複数の `mongod` のサポートを追加するクレデンシャルファイルです。

`-update` オプションまたは `-delete` オプションを `tpconfig` コマンドに使用して、MongoDB クレデンシャルを更新または削除できます。

詳しくは p.33 の「クレデンシャル設定ファイルについて」を参照してください。

- 2 `tpconfig -dappservers` コマンドを実行し、NetBackup プライマリサーバーに追加された MongoDB クレデンシャルがあることを確認します。

メモ: 暗号化されたクレデンシャル構成ファイル(名前: `appservername-portnumber.conf`)は、NetBackup プライマリサーバーの `/usr/openv/var/global/` に作成されます。

データを保護するための MongoDB 役割について

NetBackup 操作を完了するには、NetBackup で追加するアプリケーションユーザーに、必要な役割が割り当てられている必要があります。必要な役割には、すべてのデータベースに対するアクセス、問い合わせ、バックアップ、およびリストアと、クラスタを管理する権限が必要です。ルートロールをユーザーに割り当てるをお勧めします。

メモ: すべての MongoDB ノードに同じユーザーが追加されていることを確認します。

役割について詳しくは MongoDB マニュアルを参照してください。

ホストユーザーの要件

`mongod` アカウントで実行されているクラスタのホストユーザー要件:

- `tpconfig` で、`mongod` サービスアカウントをホストユーザーとして指定しないでください。
- MongoDB がインストールされているサーバーで、`sudoers` ファイルにホストユーザーを追加します。
- `tpconfig` のホストユーザーとして、`root` 以外の `sudoer` アカウントを追加していることを確認します。
- ホストユーザーにホームディレクトリがあることを確認します。
- このホストユーザーに、`mongodb.conf` ファイルに記述されているすべてのディレクトリに対する所有権を付与します。
- この手順により、バックアップホストはバックアップ操作のために必要なファイルをコピーするためにディレクトリにアクセスできることが保証されます。たとえば、`mdbserver_location`、`logdir`、`oplog_location` への権限がユーザーに必要です。

使用するホストユーザーが `root` 以外のユーザーであるか、MongoDB サーバーに対する `root` 権限を持っていない場合、次の手順を実行する必要があります。

- `tpconfig` コマンドを使用して構成されたホストユーザークレデンシャルが、MongoDB クラスタの構成に使用されるホストユーザーアカウント (MongoDB デーモンのホストユーザーアカウント) であることを確認します。
- このホストユーザーに、`mongodb.conf` ファイルに記述されているすべてのディレクトリに対する所有権を付与します。この手順により、バックアップホストはバックアップ操作のために必要なファイルをコピーするためにディレクトリにアクセスできることが保証されます。たとえば、`mdbserver_location`、`logdir`、`oplog_location` への権限がユーザーに必要です。
- ホストユーザーに、MongoDB データベースパスとその内容の所有権があることを確認します。この所有権は、バックアップおよびリストア操作に必要です。

- MongoDB がインストールされているサーバーで、`sudoers` ファイルにホストユーザーを追加します。

バックアップホストの管理

バックアップホストは、MongoDB クラスタのすべてのバックアップとリストア操作をホストするプロキシクライアントとして機能します。NetBackup 用 MongoDB プラグインの場合、バックアップホストは、MongoDB クラスタにインストールされている独立したエージェントなしですべてのバックアップとリストア操作を実行します。

バックアップホストは、Linux オペレーティングシステムである必要があります。NetBackup は、バックアップホストとして RHEL および SUSE プラットフォームのみをサポートします。

バックアップホストとして、NetBackup クライアント、メディアサーバー、またはプライマリサーバーを使用できます。NetBackup では、メディアサーバーをバックアップホストとして設定することをお勧めします。

バックアップホストを追加する前に、次の点を考慮します。

- バックアップとリストア操作用に、1つまたは複数のバックアップホストを追加できます。
- プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントが、バックアップホストの役割を実行できます。
- NetBackup 用 MongoDB プラグインは、すべてのバックアップホストにインストールされます。
- 複数のバックアップホストを使用する場合は、すべてのバックアップホストがメディアサーバーと通信していることを確認します。

NetBackup Web UI を使用して BigData ポリシーを構成している間に、バックアップホストを追加できます。

ポリシーの作成方法について詳しくは、p.43 の「[Web UI を使用した、MongoDB クラスタ用 BigData バックアップポリシーの作成](#)」を参照してください。

NetBackup プライマリサーバーの許可リストに NetBackup クライアントを含める

バックアップホストとして NetBackup クライアントを使用するには、そのクライアントを許可リストに含める必要があります。NetBackup プライマリサーバー上で許可リストへの追加手順を実行します。

許可リストへの追加は、ソフトウェアまたはアプリケーションが安全な実行を承認されていないかぎり、それらを実行しないようにシステムを制限するセキュリティ手法です。

NetBackup プライマリサーバーの許可リストに NetBackup クライアントを追加するには

- ◆ NetBackup プライマリサーバーで次のコマンドを実行します。

- UNIX の場合

```
bpsetconfig -h primaryserver
bpsetconfig> APP_PROXY_SERVER = clientname1.domain.org
bpsetconfig> APP_PROXY_SERVER = clientname2.domain.org
bpsetconfig>
UNIX systems: <ctl+D>
```

- Windows の場合

```
bpsetconfig -h primaryserver
bpsetconfig> APP_PROXY_SERVER = clientname1.domain.org
bpsetconfig> APP_PROXY_SERVER = clientname2.domain.org
bpsetconfig>
Windows systems: <ctl+Z>
```

bpsetconfig コマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

このコマンドは **APP_PROXY_SERVER = clientname** エントリをバックアップ構成 (bp.conf) ファイルに設定します。

APP_PROXY_SERVER = clientname について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』の「NetBackup クライアントの構成オプション」のセクションを参照してください。

NetBackup を使用した MongoDB のバックアップ[®]

この章では以下の項目について説明しています。

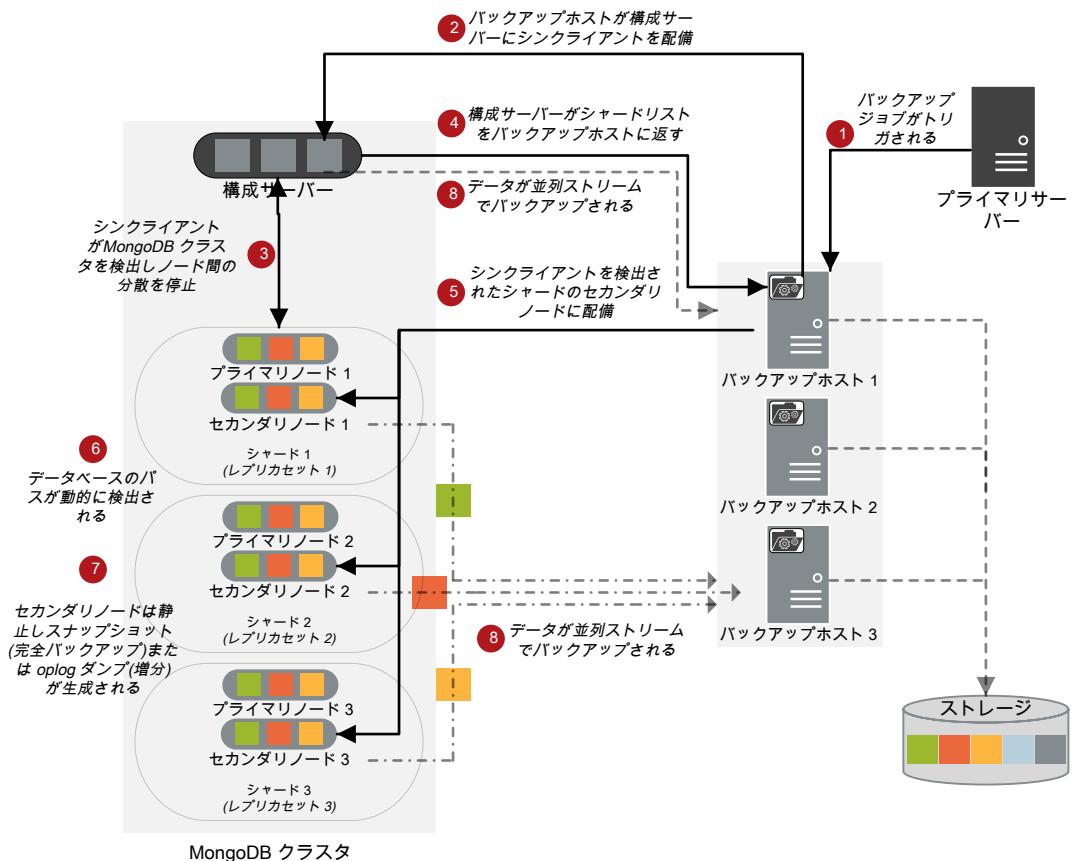
- [MongoDB データのバックアップについて](#)
- [MongoDB クラスタをバックアップするための前提条件](#)
- [MongoDB プラグイン用の NetBackup ポリシーの構成](#)

MongoDB データのバックアップについて

MongoDB データは並列ストリームでバックアップされ、バックアップ時に MongoDB データノードはデータブロックを同時に複数のバックアップホストに対してストリームします。

次の図は、バックアップフローの概要を示しています。

図4-1 バックアップフロー



図では次の内容を説明しています。

1. スケジュールされたバックアップジョブはプライマリサーバーからトリガされます。
2. MongoDBデータのバックアップジョブは複合ジョブです。バックアップジョブがトリガされると、最初に検出ジョブが実行されます。
3. 検出時に、バックアップホストは、一時的なシンクライアント(`mdbserver`)を設定サーバーに配備し、MongoDBクラスタ内のシャードの詳細を取得します。また、シンクライアントはレプリカセット内のノード間での分散を停止します。
4. クラスタについての情報を受け取った後、バックアップホストはMongoDBクラスタ内のレプリカセットのセカンダリノードにシンクライアントを配備します。

5. シンクライアントは、データベースのパスを動的に検出し、セカンダリノードを静止し、完全バックアップのためのスナップショットを取得し、増分バックアップの oplog をキャプチャします。
6. 各バックアップストリームに対して個々の子ジョブが実行され、データがバックアップされます。
7. データブロックは、異なるセカンダリノードから複数のバックアップホストに同時にストリームします。

バックアップ操作が完了すると、シンクライアントはサーバーから削除されます。

すべての子ジョブが完了するまで、複合バックアップジョブは完了しません。子ジョブが完了すると、NetBackupはセカンダリノードからすべてのスナップショットをクリーンアップします。クリーンアップ活動が完了した後にのみ、複合バックアップジョブは完了します。

p.41の「[MongoDBクラスタのバックアップ](#)」を参照してください。

MongoDBクラスタのバックアップ

バックアップジョブはスケジュール設定して実行することもできれば、手動で実行することもできます。[『NetBackup管理者ガイド Vol. 1』](#)を参照してください。

バックアップ処理の概要については、p.39の「[MongoDBデータのバックアップについて](#)」を参照してください。

MongoDBクラスタをバックアップするための前提条件

- NetBackupは、MongoDBクラスタ内のノードを選択して、次の順序でバックアップを作成します。
 - アクティブな非表示のノード
 - アクティブなセカンダリノード
 - アクティブなプライマリノード
- NetBackupがMongoDBクラスタの特定のバックアップノードを選択するようにする場合は、非表示のノードとして設定します。
- バックアップジョブを実行する前に、バックアップホスト上のすべてのMongoDBノードからping応答が正常に返されることを確認します。ファイアウォールの設定を確認して更新し、バックアップホストがMongoDBクラスタと通信できるようにします。
- 保護するMongoDBクラスタでLVMスナップショットを取得できることを確認します。
- スナップショットの論理ボリューム要件:
 - スナップショット操作を完了するために、MongoDBデータベースディレクトリが論理ボリュームにマウントされていることを確認します。

- `vgdisplay`コマンドを使用して、論理ボリュームグループ内の空き物理エクステントのサイズが、スナップショット操作を完了するために十分であることを確認します。
- MongoDBデータベースパスのボリュームグループまたはLVMの物理ボリュームと論理ボリュームの名前を変更すると、バックアップが失敗します。ボリュームグループまたはLVMの物理ボリュームと論理ボリュームの名前を変更する場合は、バックアップを作成する前に、MongoDBデータベースが新しいパスにマウントされていることを確認します。
- バックアップは`mongos`プロセスのランサーを停止し、他のすべての操作をブロックします。そのため、バックアップ処理中に、`mongos`プロセスを使用する他の操作を実行しないようにしてください。たとえば、データベースのインポートです。
- データベースのパスを変更する場合、`mongod`または`mongos`プロセスの設定ファイルを変更する場合、またはMongoDBトポロジーを変更する場合は、常に完全バックアップを実行してください。
- 単一のNetBackupバックアップポリシーに複数のMongoDBクライアントがある場合は、プライマリサーバー、メディアサーバーおよびクライアントのクライアント読み込みタイムアウトパラメータを増やして、すべてのバックアップが正常に実行されることを確認します。
詳しくは、『NetBackup™管理者ガイド vol. 1』と[タイムアウトプロパティセクション](#)を参照してください。
- 増分バックアップジョブでは、増分の変更を判断するための参照として、一貫性のあるバックアップイメージを使用します。以前のバックアップが失敗したか、部分的に成功していた場合(いすれかのノードで障害が発生した場合)、完全にスキップされ、その前に作成されたバックアップイメージが考慮されます。このような場合、バックアップ操作に時間がかかり、作成されたイメージのサイズが大きくなる可能性があります。
- `oplog`ファイルには、上限またはローリングキャッシュがあるため、ファイルのサイズを設定できます。NetBackupは、`oplog`を使用して増分データをキャプチャします。`oplog`ロールオーバーによって、増分バックアップが失敗する場合があります。これを防ぐには、増分バックアップの間に生成された増分データを保持するのに十分な`oplog`ファイルサイズであることを確認します。
- MongoDBクラスタが`mongod`アカウントで実行されている場合は、`root`以外の`sudoer`アカウントが必要です。`tpconfig`のホストユーザーの場合も同じようにアカウントを構成する必要があります。
- MongoDBクラスタが`root`以外または`root`アカウントで実行されている場合、`tpconfig`コマンドを使用して構成されたホストユーザークレデンシャルが、MongoDBクラスタの構成に使用されたホストユーザーアカウント(`root`または`root`以外のMongoDBデーモンのホストユーザーアカウント)であることを確認します。

- レプリカセットで *oplog* の保持機能を使用している場合は、増分バックアップ間のスケジュール設定された時間を *oplog* の最小保持期間よりも短くする必要があります。これにより、正しい増分バックアップが確実にキャプチャされます。
- NetBackup は、シャードクラスタ上の MongoDB 4.4 以降のサポート対象バージョンに対してのみ完全バックアップをサポートします。

MongoDB プラグイン用の NetBackup ポリシーの構成

バックアップポリシーは、NetBackup がクライアントのバックアップを作成するときに従う指示を提供します。MongoDB プラグイン用のバックアップポリシーを構成する場合は、BigData ポリシーをポリシー形式として使用します。

NetBackup Web UI を使用して、BigData ポリシーを作成できます。

Web UI を使用した、MongoDB クラスタ用 BigData バックアップポリシーの作成

- 左側で[保護 (Protection)]、[ポリシー (Policies)]の順に選択します。
- [追加 (Add)]をクリックします。
- [属性 (Attributes)]タブで、次の項目を選択します。
 - ポリシー形式 (Policy type): BigData
- [スケジュール (Schedules)]タブで、必要なすべてのスケジュールを構成します。たとえば、完全および増分スケジュールを構成します。

名前	種類	間隔	保持
完全バックアップ	完全バックアップ	1 週間	2 週間
増分バックアップ	差分増分バックアップ	1 日	2 週間

- MongoDB の設定に基づいて、[クライアント (Clients)]タブで次の値を入力します。

シャード MongoDB クラスタ:

 - MongoDB シェルで表示されるクライアント名と、プライマリ設定サーバーの mongod ポート番号は次の形式です。
MongoDBNode-portnumber

レプリカセットの MongoDB クラスタ:

- MongoDB シェルで表示されるクライアント名と、レプリカセットのプライマリノードの mongod ポート番号は次の形式です。

MongoDBNode-portnumber

スタンドアロンの MongoDB セットアップ:

- MongoDB シェルで表示されるクライアント名と、スタンドアロンノードの mongod ポート番号は次の形式です。

MongoDBNode-portnumber

警告: 警告: MongoDB 用のアビターノードを動作させるノードは入力しないでください。

- 6** [バックアップ対象 (Backup selections)] タブで、アプリケーションタイプ、バックアップホストを追加し、手動で ALL_DATABASES 指示句を追加します。

バックアップ対象リスト	注意
Application_Type=mongodb	このパラメータ値では、大文字と小文字が区別されます。
mongodbhost=mongodbhost.domain.com	Backup Host=<FQDN_or_hostname> の形式を使用します。バックアップホストには、NetBackup クライアントまたはメディアサーバーを指定できます。
ALL_DATABASES	

mongodbhost=mongodbhost.domain.com Backup Host=<FQDN_or_hostname> の形式を使用します。バックアップホストには、NetBackup クライアントまたはメディアサーバーを指定できます。

ALL_DATABASES

- 7** [作成 (Create)] をクリックします。

NetBackup を使用した MongoDB データのリストア またはリカバリ

この章では以下の項目について説明しています。

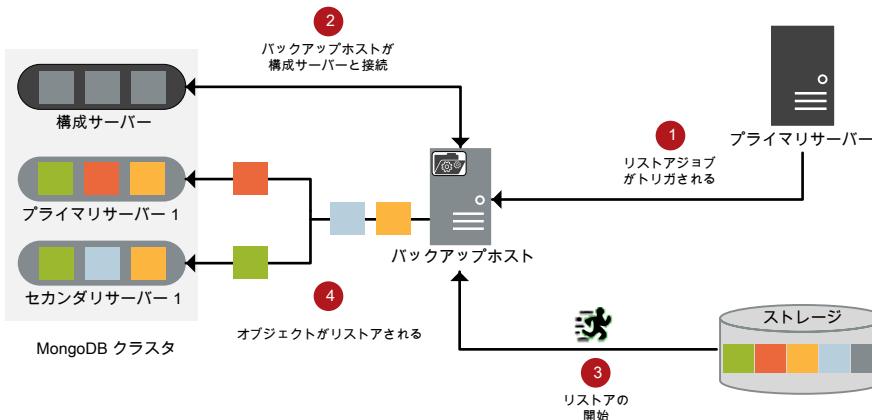
- [MongoDB データのリストアについて](#)
- [MongoDB のリストアおよびリカバリの前提条件](#)
- [同じクラスタへの MongoDB データのリストア](#)
- [代替クラスタへの MongoDB データのリストア](#)
- [高可用性の設定にある MongoDB データの代替クライアントへのリストア](#)
- [リカバリプロセス後の手動の手順](#)

MongoDB データのリストアについて

リストアの場合は、バックアップホストが必要です。バックアップホストは、プライマリサーバー、メディアサーバー、NetBackup クライアントのいずれかです。

次の図は、リストアフローの概要を示しています。

図5-1 リストアフロー



この図では、次の処理について説明します。

1. プライマリサーバーからのリストアジョブがトリガされます。
2. バックアップホストが config サーバーと接続します。バックアップホストは宛先クラスタでもあります。
3. ストレージメディアからの実際のデータリストアが開始されます。
4. データブロックは MongoDB クラスタにリストアされます。

MongoDBのリストアおよびリカバリの前提条件

リストアまたはリカバリ処理を開始する前に、次の前提条件と制限事項を確認します。

- ソース MongoDB クラスタとターゲット MongoDB クラスタで、次が同じであることを確認します。
 - MongoDB のバージョン
 - 認証タイプ
- ターゲット MongoDB クラスタが mongod アカウントで実行される場合は、root 以外の sudoer アカウントが必要です。また、リストアを開始する前にこれを tpconfig でホストユーザーとして構成します。NetBackup は、ターゲットクラスタのユーザーでインスタンスをリカバリして実行します。
- (代替クラスタに MongoDB データをリストアする場合) ソースクラスタのクレデンシャルファイルに代替 MongoDB クラスタのクレデンシャルを追加するようにします。[p.32の「NetBackupでのMongoDBクレデンシャルの追加」](#)を参照してください。

- リカバリ操作を開始する前に、宛先クラスタで PEM ファイルまたはセキュリティ証明書が利用可能であることを確認します。
- リカバリ処理中のターゲットクラスタの認証形式は、バックアップ中の認証形式と同じである必要があります。
- ターゲットの MongoDB クラスタに、データをリストアするための十分な空きストレージ領域があることを確認します。
- 1つの完全バックアップイメージグループと、適切な増分イメージを選択します。複数の完全バックアップイメージグループを選択した場合、リストアされたデータが破損する可能性があるため、リカバリが失敗することがあります。
- MongoDB 用 NetBackup プラグインでは、クロスプラットフォームのファイルシステムのリストアはサポートされません。たとえば、XFS から ext4、またはその逆はサポートされません。
- `tpconfig` コマンドで定義された `HostUser` の値が、MongoDB クラスタの設定に使用されるホストユーザー アカウント (MongoDB デーモンのホストユーザー アカウント) と同じであることを確認します。(MongoDB デーモンのホストユーザー アカウント。)
- 宛先クライアントについて、リストアジョブを送信する前に、バックアップ ホストを選択していることを確認します。
- 指定した時点へのリカバリは、増分バックアップからのリカバリにのみ有効です。
- 複合リストアジョブの親ジョブをキャンセルしても、子リストアジョブはキャンセルされません。子リストアジョブも手動で取り消す必要があります。
- Web UI でリストアジョブまたはリカバリジョブを開始した後、[リカバリ (Recover)] ノードの [タスクの進捗 (Task progress)] セクションでジョブレコードと状態を検索します。ジョブがリストに表示されるまでに時間がかかる可能性があり、複合ジョブは親のリカバリ前チェックを開始するのに時間がかかることがあります。タスクリストを更新するには、[更新 (Refresh)] をクリックします。
- シャードクラスタのリストアのみ操作では、標準のリストアのみ手順に従います。リストアを開始する前に、すべての MongoDB プロセス (`mongos` または `mongod`) を停止します。
`tpconfig` ホストユーザーには、元のリストアおよび代替リストアのターゲット フォルダに対する権限が必要です。
- MongoDB ログファイルのパスは元の構成と同じままになります。代替リストアを実行する場合、次のようにします。
 - リストア時に同じパスが利用可能であることを確認します。
 - リカバリが正常に実行された後に、`mongod` または `mongos` プロセスの構成ファイルのログファイルパスを変更します。
- リカバリ操作が正常に実行されるようにするには、宛先の MongoDB クラスタで、`.pid` ファイルへのパスが利用可能である必要があります。

- 同じサーバーで実行される複数のMongoDBクラスタをバックアップする場合は、特別な考慮事項が必要です。(同じまたは異なるバックアップポリシーを使用するバックアップ。)リストアする正しいアプリケーションサーバーを選択していることを確認します。

たとえば、次の構成の複数のクラスタがあるとします。

Replica1

Primary: host1:26050
Secondary: host1:26060

Replica2

Primary: host1:26055
Secondary: host1:26066

Replica1をリカバリする場合、正しいアプリケーションサーバーとそのポート(host1-26050)をソースクライアントとして指定していることを確認します。

- リカバリ操作を開始する前に、次のパスのMongoDBインスタンスで古いmdbserver(シンクライアント)プロセスが実行されていないことを確認します。

/< mdbserver_location >/< Host >-< MongodPort >-< mdbserver_port_in_range >/mdbserver

これらの古いプロセスのいずれかが実行されている場合、リカバリ操作はMongoDBインスタンスをシャットダウンできないため、リカバリジョブが応答を停止します。

- MongoDBクラスタのリストアとリカバリには、バックアップ時に使用されるセキュリティモードと同じモードが必要です。元のクラスタとターゲットクラスタのセキュリティモードが同じであることを確認してください。

たとえば、バックアップ時にSSLを使用した場合、リカバリはSSLを使用して行われ、ターゲットの設定はSSLに変更されます。同様に、バックアップ時にTLSを使用した場合、リカバリはTLSを使用して行われ、ターゲットの設定はTLSに変更されます。

- MongoDBクラスタのリストアとリカバリには、バックアップ時に使用される機能の互換性のバージョン(FCV)と同じ値が必要です。元のクラスタとターゲットクラスタのFCVが同じであることを確認してください。

たとえば、バックアップ時のFCVが4.2の場合、リストアではFCV 4.2を使用し、リカバリ処理の完了後、ターゲットクラスタはFCV 4.2になります。同様に、バックアップ時のFCVが4.0の場合、リストアではFCV 4.0を使用し、リカバリ処理の完了後、ターゲットクラスタはFCV 4.0になります。

同じクラスタへのMongoDBデータのリストア

このトピックでは、同じクラスタにMongoDBデータをリストアする方法について説明します。

同じクラスタにMongoDBデータをリストアするには

- 1 NetBackup Web UIを開きます。
- 2 左側の[リカバリ(Recovery)]をクリックします。
- 3 [標準リカバリ(Regular recovery)]で[リカバリの開始(Start recovery)]をクリックします。
- 4 [基本プロパティ(Basic properties)]で以下を入力します。
 - [ポリシー形式(Policy type)]として[BigData]、[MongoDB]を選択します。
 - [ソースクライアント(Source client)]リストから、必要なアプリケーションサーバーを選択します。
 - [宛先クライアント(Destination client)]リストから、必要なバックアップホストを選択します。バックアップホストがノードをバックアップしたメディアサーバーの場合、リストアはより短時間で行われます。
 - [次へ(Next)]をクリックします。
- 5 [リカバリの詳細(Recovery details)]で次の操作を実行します。
 - 必要に応じて、[編集(Edit)]をクリックして、データセット全体をリストアする適切な日付範囲を選択します。または[バックアップ履歴の使用(Use backup history)]を選択し、リストアするバックアップイメージを選択します。
 - 個別リストアと個別リカバリは、MongoDBではサポートされません。そのため、リストア処理ですべてのファイルとフォルダを選択してください。
 - [次へ(Next)]をクリックします。
- 6 [リカバリオプション(Recovery options)]で次の操作を実行します。
 - バックアップを実行したのと同じ場所にファイルをリストアするには、[元の位置にすべてをリストア(Restore everything to its original location)]を選択します。
 - [MongoDBオプション(MongoDB options)]で、[リストアとリカバリ(Restore and recover)]を選択して現在時刻のデータベースをリカバリするか、特定のスケジュールを選択します。
 - [次へ(Next)]をクリックします。
- 7 リカバリの詳細を確認し、[リカバリの開始(Start recovery)]をクリックします。

代替クラスタへのMongoDBデータのリストア

NetBackupは、MongoDBに対して次の代替リカバリシナリオをサポートします。

- 代替クラスタへのリダイレクトリストアとリカバリ

- 既存のクラスタ内の代替ノードまたはポートまたはデータベースパスへのリダイレクトリストアおよびリカバリ

代替クラスタにMongoDBデータをリストアするには

- 代替アプリケーションサーバーのクレデンシャルを使用して、元のクラスタのクレデンシャルを更新する `tpconfig` コマンドを実行します。

たとえば、ソースクライアント `Host1-26050` を、ポート `28001` で稼働する代替アプリケーションサーバー `Host2` にリカバリするには、次のようにします。

- 元のクラスタのクレデンシャル設定ファイルに、`Host2:28001` および関連するノードのクレデンシャルを追加します。

[p.33 の「クレデンシャル設定ファイルについて」](#)を参照してください。

- リカバリ対象 (`Host1-26050`) の `application_server` に対する更新 `tpconfig` コマンドを実行します。

サンプルコマンドを次に示します。

```
/usr/openv/volmgr/bin/tpconfig -update -application_server Host1-26050 -application_type mongodb -requiredport 26050 -application_server_conf /usr/openv/var/global/credential.conf
```

- NetBackup Web UIを開きます。

- 左側の[リカバリ (Recovery)]をクリックします。

- [標準リカバリ (Regular recovery)]で[リカバリの開始 (Start recovery)]をクリックします。

- [基本プロパティ (Basic properties)]で以下を入力します。

- [ポリシー形式 (Policy type)]として[BigData]、[MongoDB]を選択します。
- [ソースクライアント (Source client)]リストから、必要なアプリケーションサーバーを選択します。
- [宛先クライアント (Destination client)]リストから、必要なバックアップホストを選択します。バックアップホストがノードをバックアップしたメディアサーバーの場合、リストアはより短時間になります。
- [次へ (Next)]をクリックします。

- [リカバリの詳細 (Recovery details)]で次の操作を実行します。

- 必要に応じて、[編集 (Edit)]をクリックして、データセット全体をリストアする適切な日付範囲を選択します。または[バックアップ履歴の使用 (Use backup history)]を選択し、リストアするバックアップイメージを選択します。
- 個別リストアと個別リカバリは、MongoDBではサポートされません。そのため、リストア処理ですべてのファイルとフォルダを選択してください。

- [次へ (Next)]をクリックします。
- 7 [リカバリオプション (Recovery options)]で次の操作を実行します。
- アプリケーションサーバーとそのノードの名前を変更し、代替アプリケーションサーバーの値を設定します。
[個々のディレクトリやファイルを異なる位置にリストア (Restore individual directories and files to different locations)]を選択します。フォルダパスを変更するには、[ファイルパスを編集 (Edit file paths)]をクリックします。
[p.51の「ネストされたデータベースパスからの代替リストア」](#)を参照してください。
 - [MongoDB オプション (MongoDB options)]で、[リストアとリカバリ (Restore and recover)]を選択して現在時刻のデータベースをリカバリするか、特定のスケジュールを選択します。
 - [次へ (Next)]をクリックします。
- 8 内容を確認して[リカバリの開始 (Start recovery)]をクリックします。
状態はアクティビティモニターで確認できます。

代替の一時的な場所へのMongoDB oplogファイルのリストア

増分バックアップから代替パスにMongoDB oplogファイルをリストアできます。ファイルとそのパスは、Web UIに表示されます。

代替リストア時にパスを指定するには、[個々のディレクトリやファイルを異なる位置にリストア (Restore individual directories and files to different locations)]オプションを使用する必要があります。

元のMongoDBパスを保持しながらoplogファイルパスを変更する場合は、[ファイルパスを編集 (Edit file paths)]をクリックして、ソースパスと代替パスを指定します。

たとえば、ソース /host:port/tmp と宛先 /host:port/alternate_tmp です。

ネストされたデータベースパスからの代替リストア

ネストされたデータベースパスから代替リストアを実行するには、[宛先の追加 (Add Destination)]ダイアログボックスを使用して、すべてのサブフォルダに対して適切なターゲットの代替パスを追加します。

たとえば、パスを /host:port/usr/mongodb/db1 から
/host:port/alt-dir/dbpath/mydb に変更するには、次のようにします。

- ソースと宛先のパスを指定します。
ソース /host:port/usr/mongodb/db1 と宛先 /host:port/alt-dir/dbpath/mydb
- 親フォルダに対してソースと宛先のパスを指定します。
ソース /host:port/usr/mongodb と宛先 /host:port/alt-dir/dbpath
- ベース親フォルダに対してソースパスと宛先のパスを指定します。

ソース /host:port/usr と宛先 /host:port/alt-dir

メモ: root以外のパスに代替リストアを実行すると、データベースパスに複数のサブフォルダが含まれている場合、リストアは部分的に成功します。

このような場合、別の場所への代替リストアを実行するときに、各ディレクトリレベルのエントリを追加する必要があります。

次に例を示します。

```
ソース: /hostname1:port1/Config_Data
宛先: /hostname2:port3/mongo_inst2
ソース: /hostname1:port1/Config_Data/data
宛先: /hostname2:port3/mongo_inst2/data
ソース: /hostname2:port2/Shard1_Primary
宛先: /hostname2:port3/mongo_inst2
ソース: /hostname2:port2/Shard1_Primary/data
宛先: /hostname2:port3/mongo_inst2/data
```

同じレプリカセット内の異なるMongoDBノードからのバックアップが行われるMongoDBクラスタのリストア

異なるノードからバックアップされたMongoDBクラスタ(シャードまたはレプリカセット)をリストアできます。この機能は、シャードまたはレプリカセット内での役割の切り替え(プライマリノードとセカンダリノード間)のために用意されています。このような場合、1つのホストから完全バックアップを実行し、同じシャードまたはレプリカセット内の別のホストから増分バックアップを取得できます。

リストア時に、これらのバックアップイメージのリストア先を同じMongoDBホストに変更する必要があります。

たとえば、/host1:port1/dbpathと/host2:port1/tmpからのバックアップをリストアするには、次のように指定します。

```
ソース /host1:port1/dbpath と宛先 /althost:port1/dbpath
ソース /host2:port1/tmp と宛先 /althost:port1/tmp
```

高可用性の設定にあるMongoDBデータの代替クライアントへのリストア

バックアップポリシーで定義されるクライアント (MongoDBnode-port) が利用できない場合は、次の手順を使用して、同じ MongoDB クラスタ (MongoDBnode-port) の別のクライアントにリストアします。

高可用性の設定では、次のように MongoDB データをリストアできます。

- シャード MongoDB クラスタ
 - 同じ MongoDB クラスタ内の代替構成サーバーにリストアします。
- レプリカセットの MongoDB クラスタ
 - 同じ MongoDB クラスタ内のレプリカセットの代替ノードにリストアします。

高可用性の設定にある MongoDB データを代替クライアントにリストアするには

- 1 Web UI を開きます。
- 2 左側の[リカバリ (Recovery)]をクリックします。[標準リカバリ (Regular recovery)]で[リカバリの開始 (Start recovery)]をクリックします。
- 3 アプリケーションサーバーとそのノードの名前を変更し、代替アプリケーションサーバーの値を設定します。
 - [個々のディレクトリやファイルを異なる位置にリストア (Restore individual directories and files to different locations)]を選択し、[ファイルパスを編集 (Edit file paths)]をクリックして、代替アプリケーションサーバーを追加します。
 - application_server (Host1:port1) がターゲット application_server (Host2:Port2) と異なる場合、rename エントリには ALT_APPLICATION_SERVER=Host2:Port2 が含まれる必要があります。次の例では、バックアップポリシーで定義されるソースクライアントが endu79-26050 であり、MongoDB ノード endu79-26055 によってバックアップが実行されました。このシナリオでは、リストアおよびリカバリの一部として、endu79:26055 を次のように追加します。
ALT_APPLICATION_SERVER=endu79:26055。

リカバリプロセス後の手動の手順

- 非表示の MongoDB ノードから取得されたバックアップイメージをリカバリした後、非表示のノードはプライマリノードになります。次のコマンドを使用して、このようなすべてのプライマリノードをシャードリストで更新し、mongos プロセスを再起動します。

```
db.getSiblingDB('config').shards.updateOne({ "_id" : "shard1" }, {  
  $set : { "host" :
```

```
"ShardName/repl1.example.net:27018,repl2.example.net:27018,repl3.example.net:27018"  
} })
```

- リカバリ処理が完了したら、クラスタにセカンダリノードを手動で追加します。ノードを追加する前に、セカンダリノードの MongoDB データパスの所有権とアクセス権が正しく設定されていることを確認します。
詳しくは、次の記事を参照してください。[add-members-to-the-replica-set](#)
- リカバリ操作の後、mongod または mongos プロセスが、/tmp の場所からの設定ファイルを使用して開始されます。選択した場所に構成ファイルを移動し、その場所からサービスを再起動していることを確認します。
/tmp の場所から構成ファイルを削除して、リストアまたはリカバリ操作時に異なるユーザーに対して同じ名前を使用して /tmp の場所にファイルをリストアできるようにします。ファイルを削除しないと、構成ファイルが /tmp の場所でリストアできないために、別のユーザーを使用した後続のリカバリ操作がエラー 2850 で失敗します。
リストアされるバックアップデータから変更がある場合は、さらに MongoDB 構成パラメータを追加できます。
- リカバリの前に systemctl コマンドを使用して MongoDB サービスを開始すると、systemctl status mongod コマンドで mongod の状態がリカバリ後に停止したと示すことがあります。これは、リカバリ後に、/tmp の場所にある config ファイルを使用して mongod サービスが起動されたために発生します。
このような場合は、systemctl start mongod コマンドを使用してサービスを再び起動します。

トラブルシューティング

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup for MongoDB のデバッグログについて](#)
- [NetBackup を使用した MongoDB の保護に関する既知の制限事項](#)

NetBackup for MongoDB のデバッグログについて

NetBackup は、バックアップ操作とリストア操作に関連するさまざまなプロセスのプロセス固有のログを保持します。これらのログを調べて、問題の根本原因を見つけることができます。

これらのログフォルダは、ログの記録用にあらかじめ存在している必要があります。これらのフォルダが存在しない場合は作成する必要があります。

さらに、すべてのジョブ（バックアップまたはリストア）の実行後に、MongoDB ノードで生成された `mdbserver` ログは、処理された場所からそれぞれのバックアップホストにコピーされます。これらのログは `nbaapireq_handler` フォルダに保存され、`nbsu` ユーティリティまたは `nbcplogs` ユーティリティによって収集できるようにされます。異なるホストから収集されたログファイル名の一意性を1つのフォルダに保持するために、各ログファイル名の先頭にはホスト名が付けられます。たとえば、バックアップジョブに対してホスト `MDBSERVER1` および `MDBSERVER2` の `mdbserver` によって生成されたログファイルが「`root.mdbserver.121219_00001.log`」である場合は、
`MDBSERVER1-root.mdbserver.121219_00001.log` と
`MDBSERVER2-root.mdbserver.121219_00001.log` としてバックアップホストにコピーされます。

次のディレクトリにあるログフォルダ

- Windows の場合: `install_path\NetBackup\logs`
- UNIX または Linux の場合: `/usr/openv/netbackup/logs`

表 6-1 MongoDB に関する NetBackup ログ

ログフォルダ	メッセージの内容	ログの場所
install_path/NetBackup/logs/nbaapidiscv	BigData フレームワーク、検出、および MongoDB 構成ファイルのログ	バックアップホスト
install_path/NetBackup/logs/bpbprm	ポリシー検証、バックアップ、およびリストア操作	メディアサーバー
install_path/NetBackup/logs/bpbkar	バックアップ	バックアップホスト
install_path/NetBackup/logs/tar	リストアおよび MongoDB 構成ファイル	バックアップホスト
install_path/NetBackup/logs/nbaapireq_handler	nbaapireq_handler と mdbserver	バックアップホスト

詳しくは、『[NetBackup ログリファレンスガイド](#)』を参照してください。

NetBackup を使用した MongoDB の保護に関する既知の制限事項

次の表に、NetBackup を使用した MongoDB の保護に関する既知の制限事項を示します。

表 6-2 既知の制限事項

制限事項	回避方法
複数の mongos プロセスを含む高可用性を備えたシャード MongoDB クラスタの構成を想定します。リストアとリカバリ操作を開始する前に、CSRS (構成サーバーレプリカセット) イメージに対し、リストア先で mongos プロセスのみが実行されている必要があります。	リストアとリカバリを開始する前に mongos プロセスを停止していない場合は、リカバリ後に、古い mongos プロセスを手動で停止する必要があります。その後、クラスタ内のすべてのリカバリ済み mongod と mongos プロセスを再起動します。
リストア操作とリカバリ操作を開始する前に、クラスタ内の他の mongos プロセスを手動で停止します。	
リカバリ後、リカバリされたクラスタを指すように、mongos サービスを再構成します。	
1つを除くすべてのノードで mongos プロセスが停止していない場合、追加の mongos プロセスがリストア操作と競合することがあります。この状況により、リストアされたデータに、mongos への接続でアクセスできなくなります。	

制限事項	回避方法
構成ファイルへの絶対パスを使用して、MongoDB プロセスを開始する必要があります。証明書ファイルと CA ファイルの絶対パスも使用する必要があります。CA ファイル、PEM ファイル、鍵ファイルの絶対パスも指定する必要があります。	該当なし
バックアップの変更中に存在した認証形式を変更し、別の認証を必要とするリカバリジョブを実行すると、リカバリ処理が失敗することがあります。	リカバリ中の認証形式が、バックアップ中に使用した形式と同じであることを確認します。
バックアップの実行後にボリュームグループまたは論理ボリュームの名前を変更した場合、後続のバックアップが失敗することがあります。	該当なし
リカバリ時には、1 つの完全バックアップイメージと、関連する後続の増分イメージだけが選択されていることを確認します。複数のイメージを選択した場合、リストアされたデータが破損する可能性があるため、リカバリが失敗することがあります。	該当なし
MongoDB クラスタをリカバリした後、リストアされたノードのクラスタ情報のみが利用可能です。	リカバリ処理が完了したら、クラスタにセカンダリノードを手動で追加します。 詳しくは、次の記事を参照してください。 add-members-to-the-replica-set
バックアップ処理中に、MongoDB インポート操作が実行されると、応答しなくなる可能性があります。バックアップまたはリストア処理中は、MongoDB インポート操作を回避します。	該当なし
リストア処理中に、[リストアは正常に開始されました (The restore was successfully initiated)] というメッセージが表示されますが、リストアジョブは開始されません。	この問題は、Web UI で[ソースクライアント (Source client)]と[宛先クライアント (Destination client)]の両方にアプリケーションサーバーを入力した場合に発生します。 [ソースクライアント (Source client)]と[宛先クライアント (Destination client)]が正しく入力されていることを確認します。[ソースクライアント (Source client)]はアプリケーションサーバー、[宛先クライアント (Destination client)]はバックアップホストである必要があります。
環境に DNAT がある場合は、バックアップホストまたはリストアホストとすべての MongoDB ノードが同じプライベートネットワークにあることを確認します。	該当なし
MongoDB 用 NetBackup ブラグインでは、コマンドライン bprestore のオプション -w および -print_jobid はサポートされません。	該当なし

制限事項	回避方法
MongoDB のリストアは、バックアップホストからはサポートされません。MongoDB のすべてのリストア操作は、NetBackup プライマリから開始する必要があります。	該当なし
リストジョブの送信にリストジョブが表示されない場合は、宛先ノードに MongoDB プラグインがインストールされているかどうかを確認します。	該当なし
非 LVM の場所に MongoDB データベースをリストアして、この非 LVM の場所からバックアップを作成しようとすると、バックアップは失敗します。	LVM の場所にデータをリストアし、リストアされたデータのバックアップの作成を試行します。
MongoDB 用 NetBackup プラグインでは、データパスフォルダ内のハードリンクまたはソフトリンクはサポートされません。異なる論理ボリュームまたは非論理ボリュームの場所を指すハードリンクまたはソフトリンクを追加しないでください。 NetBackup は、データパスフォルダにハードリンクまたはソフトリンクがある場合、バックアップ時にデータが一貫していることを保証できません。リストア処理時に、ハードリンクまたはソフトリンクはリンクではなくフォルダとして作成されます。	該当なし
MongoDB のリストアおよびリカバリ処理中に子のリストジョブをキャンセルすると、シンクライアント (mdbserver) はすぐには削除されません。シンクライアントは、次のリストア操作の後に削除されます。	該当なし
MongoDB のリストアが失敗し、エラー 2850 が表示されます。	<p>次の解決方法を検討してください。</p> <ul style="list-style-type: none">■ 宛先ホストとポートが有効であり、tpconfig コマンドとクレデンシャルファイルを使用してクレデンシャルが構成されていることを確認します。詳しくは tar ログを参照してください。■ ターゲットデータベースのパスが存在せず、root 以外のユーザーに対して十分な権限がありません。 <p>回避方法:</p> <ul style="list-style-type: none">ターゲットデータベースのパスが存在し、root 以外のユーザーに対して十分な権限があることを確認します。名前変更および filelist ファイルに特殊文字が含まれないことを確認します。また、プライマリサーバーが Windows コンピュータの場合、ファイルの EOL 変換が Unix Style (LF) であることを確認してください。

制限事項	回避方法
<p>リカバリ後に、MongoDB シャードノードを手動で再起動できず、MongoDB のログに次のエラーが表示されます。</p> <p>NoSuchKey: Missing expected field "configsvrConnectionString"</p>	<p>問題が発生した MongoDB シャードで、保守モードで MongoDB を起動し、管理データベースの system.version コレクションで次の方法を実行します。</p> <pre>use admin db.system.version.deleteOne ({ _id: "minOpTimeRecovery" })</pre>
<p>1つ以上のレプリカセットを含むリストア操作では、 rs.config() によって提供されるデフォルトの "cfg.members[#.host" 値を使用して、レプリカセットメンバーがレプリカセットにリストアされます。</p> <p>この値が以前にデフォルト値から更新された場合、リストアおよびリカバリが完了した後に、元の構成と一致するようにこの値を更新する必要がある場合があります。(たとえば、短縮名から FQDN など。)</p>	<p>回避方法:</p> <ol style="list-style-type: none">1 レプリカセットの MongoDB クラスタにログオンします。2 次のコマンドを使用して、構成を確認します。 <pre>rs.conf()</pre>3 次のコマンドを使用して、レプリカセットの構成を更新します。 <pre>Update configuration for replica set member 0: cfg = rs.conf(); cfg.members[0].host = '<hostname.domain.com>: <port-number>'; rs.reconfig(cfg)</pre>4 次のコマンドを使用して、変更内容を確認します。 <pre>rs.conf()</pre>5 その他のレプリカセットとメンバー、またはレプリカセットメンバーのみに対し、手順を繰り返します。

制限事項	回避方法
<p>バックアップジョブが失敗し、次のエラーコードが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ (50) クライアントのプロセスは異常終了しました (client process aborted) ■ (1) 要求された操作は部分的に成功しました。 (The requested operation was partially successful.) ■ (112) ファイルリストでファイルが指定されていません (no files specified in the file list) 	<p>同じ MongoDB クラスタについて、増分バックアップのバックアップ処理時間が異なることを確認します。同じ MongoDB クラスタの増分バックアップでは、バックアップ処理時間が互いに重複しないようにする必要があります。</p> <p> mdbserver の場所、oplog の場所、スナップショットのマウントの場所に対して権限が適切に設定されていることを確認します。詳しくは、p.36 の「ホストユーザーの要件」を参照してください。</p> <p>シャード MongoDB クラスタ環境で、112 エラーは、バックアップポリシーで定義されたクライアントで mongos プロセスが実行されていないことを示す場合があります。</p> <p>また、エラー 112 は、複数のバックアップホストの同じホスト名が BigData ポリシーに追加されていることを示す場合もあります。バックアップ操作を実行している複数のバックアップホストに対して、一意のホスト名を使用します。</p>
<p>リストア操作の後に、mongod サービスまたは mongos サービス (service mongod stop または service mongod restart) を停止して再起動しようとすると、コマンドは失敗します。</p> <p>このエラーは、mongod プロセスまたは mongos プロセスが、service コマンドまたは systemctl コマンドを使用してサービスとして起動され、直接コマンドを使用していない場合に発生します。</p>	<p>回避方法:</p> <p>別のある方法を使用して、mongod サービスまたは mongos サービスを停止します。たとえば、mongod -f /etc/mongod.conf --shutdown や kill <PID> などです。サービスを停止した後、service コマンドまたは systemctl コマンドを再び使用できます。</p> <p>メモ: リストアとリカバリの後でサービスを停止すると、.pid ファイルまたは .sock ファイルは、mongod プロセスまたは mongos プロセスを終了するときにそのまま残ります。mongod サービスまたは mongos サービスがシャットダウン後に開始されない場合は、ファイルを削除する必要があります。</p> <p>.sock ファイルのデフォルトの場所は /tmp です。</p> <p>.pid ファイルのデフォルトの場所は /var/run/mongodb/ です。</p>
<p>.bashrc で出力を生成するコマンドが追加された場合、バックアップ操作は失敗します。</p> <p>バックアップはエラー 6646 で失敗し、次のエラーが表示されます。</p> <p>エラー: サーバーと通信できません。 (Unable to communicate with the server.)</p>	<p>.bashrc (echo またはその他の出力生成コマンド) で出力が生成されないことを確認します。シェルが非対話型である場合、出力に STDERR または STDOUT を返すことはできません。</p>

制限事項	回避方法
2つの完全バックアップイメージを選択し、2つの完全バックアップイメージの間の指定した時点のイメージにリストアしようとすると、最新の完全バックアップイメージがリストアされます。	回避方法: リストア操作中は、複数の完全バックアップイメージを選択しないでください。 指定した時点へのリカバリを効果的に行うには、より短い期間で差分増分バックアップを実行します。
[リカバリ (Recover)]ノードでリストジョブの進行状況を表示できません。	回避方法: リストアホストとしてプライマリ以外のサーバーを使用する複合リストジョブの場合、[リカバリ (Recover)]ノードの[タスクの進捗 (Task progress)]セクションでジョブレコードと状態を検索します。タスクリストを更新するには、[更新 (Refresh)]をクリックします。
バックアップが次のエラーで失敗します。 (6625) バックアップホストは、操作を実行する権限がないか、アプリケーションサーバーとの接続を確立できません。(The backup host is either unauthorized to complete the operation or it is unable to establish a connection with the application server.)	回避方法: MongoDB がインストールされたサーバーで、/etc/ssh/sshd_config ファイルで PasswordAuthentication が無効になっていないことを確認します。 sudo service sshd restart コマンドを実行します。
バックアップが次のエラーで失敗します。 (6646) サーバーと通信できません。(Unable to communicate with the server.)	回避方法: バックアップホストが、mongodb.conf ファイルに定義されているポートまたはデフォルトの mdbserver_port (11000) にアクセスできることを確認します。 次の問題により、MongoDB サーバーのシンクライアントファイルをコピーするときにエラーが発生する場合があります。 <ul style="list-style-type: none">■ MongoDB サーバーとの接続の問題■ シンクライアントファイルをコピーするための場所に対する権限がユーザーに付与されていない

制限事項	回避方法
<p>次のエラーが <code>mdbserver</code> ログに表示されます。</p> <pre>error-sudo: sorry, you must have a tty to run sudo</pre>	<p>回避方法:</p> <ul style="list-style-type: none"> <code>requiretty</code>オプションをグローバルに無効にするには、<code>sudoers</code> ファイル内で、<code>Defaults requiretty</code> を <code>Defaults !requiretty</code> に置き換えます。この処理によって、グローバルの <code>sudo</code> 構成が変更されます。 ユーザー、グループまたはコマンドの <code>sudo</code> 構成を変更できます。MongoDB がインストールされているサーバーで、<code>sudoers</code> ファイルにホストユーザーまたはグループ、またはコマンドを追加します。 <code>Defaults /path/to/my/bin !requiretty</code> を追加します。 <code>Default <host_user> !requiretty</code> を追加します。
<p><code>nbaapireq_handler</code> ログフォルダが、<code>mklogdir</code> コマンドを実行した後も Flex コンテナに作成されません。</p>	<p>回避方法:</p> <p>Flex Appliance がバージョン 8.1.2 から 8.2 にアップグレードされ、Flex メディアサーバーがバックアップホストとして使用されている場合、MongoDB プラグインは次のログディレクトリを作成します。</p> <pre>/usr/openv/netbackup/logs/nbaapireq_handler</pre>
<p><code>free_space_percentage_snapshot</code> パラメータによって記述されるスナップショットサイズは、MongoDB クラスタサイズに従って設定する必要があり、十分な大きさである必要があります。これらの条件が満たされない場合、バックアップは失敗し、次のエラーが表示されます。</p> <pre>invalid command parameter (20)</pre>	<p>MongoDB クラスタで <code>free_space_percentage_snapshot</code> 値を検証します。</p>
<p>バックアップが次のエラーで失敗します。</p> <pre>(13) メディアのファイルの読み込みに失敗しました (file read failed for Media)</pre>	<p>次のことを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> プライマリサーバー上の NetBackup のバージョンが最新である。 メディアサーバーの NetBackup バージョンはプライマリサーバーと同じだが、バックアップホストの NetBackup クライアントのバージョン以降のバージョンである。 バックアップホストの NetBackup クライアントバージョンが、メディアサーバーと同じかそれよりも古いバージョンである。
<p><code>mdb_progress_loglevel</code> パラメータが MongoDB 構成ツールから見つかりません。</p>	<p><code>mdb_progress_loglevel</code> パラメータを変更するには、MongoDB 構成ツールによって作成された後に <code>mongodb.conf</code> ファイルを更新します。</p> <p>詳しくは、『MongoDB 管理者ガイド』を参照してください。</p>

制限事項	回避方法
スナップショットが削除されず、古いmdbserver インスタンスが表示されます。このシナリオでは、バックアップ中に Cannot lstat エラーが発生するか、バックアップが部分的に成功する可能性があります。	<p>mongodb.conf ファイル内の次のパラメータの構成設定を変更します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ cleanup_time_in_min■ mdbserver_timeout_min <p>次回の完全バックアップスケジュールまたは増分バックアップスケジュールの前に、mdbserver の無効なスナップショットと無効なインスタンスが消去されるように値を設定します。</p>

制限事項	回避方法
<p>バックアップホストに 8.3 より前のバージョンの NetBackup があり、プライマリサーバーとメディアサーバーに NetBackup の最新バージョンがある場合、次の無効なエラーコードが各種シナリオで表示されることがあります。</p> <p>13302、13303、13304、13305、13306、13307、13308、 13309、13310、13311、13312、13313、13314、13315</p>	

制限事項	回避方法
	<p>回避方法:</p> <p>実際のシナリオおよび推奨処置に対して無効なエラーコードが表示された場合は、対応する次の実際のエラーコードのリストを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none">■ 無効なエラーコード: 13302 実際のエラー: 6724 メッセージ: リストアするノード数が無効です。(Restore node count is invalid.)■ 無効なエラーコード: 13303 実際のエラー: 6725 メッセージ: MongoDB レプリカセットの情報が見つかりません。(Unable to find information about the MongoDB replica set.)■ 無効なエラーコード: 13304 実際のエラー: 6704 メッセージ: 1 つのレプリカセットで複数の MongoDB ノードをリストアすることは無効です。(Restoring multiple MongoDB nodes on one replica set is invalid.)■ 無効なエラーコード: 13305 実際のエラー: 6705 メッセージ: アービターノードの MongoDB データをリストアすることは無効です。(Restoring MongoDB data on an arbiter node is invalid.)■ 無効なエラーコード: 13306 実際のエラー: 6706 メッセージ: 検出したシャードはドレイン状態のため、バックアップを続行できません。(A discovered shard was found in a drain state, cannot proceed with backup.)■ 無効なエラーコード: 13307 実際のエラー: 6707 メッセージ: サポート対象外の MongoDB ストレージエンジンが検出されました。(An unsupported MongoDB storage engine is detected.)■ 無効なエラーコード: 13308 実際のエラー: 6708 メッセージ: コマンド出力を解析できません。(Unable to parse command output)■ 無効なエラーコード: 13309 実際のエラー: 6709 メッセージ: コマンドを実行できません。(Unable to run the command.)

制限事項	回避方法
	<ul style="list-style-type: none">■ 無効なエラーコード: 13310 実際のエラー: 6710 メッセージ: データベースのパスに Wired Tiger Log ファイルがあるためリカバリの事前チェックに失敗しました。 (Pre-check for recovery has failed as Wired Tiger Log files are present at the database path.)■ 無効なエラーコード: 13311 実際のエラー: 6711 メッセージ: MongoDB 構成ファイルをバックアップできません。(Unable to backup MongoDB configuration file.)■ 無効なエラーコード: 13312 実際のエラー: 6712 メッセージ: 以前のバックアップの操作ログが見つかりません。(Unable to find operation log for previous backup.)■ 無効なエラーコード: 13313 実際のエラー: 6713 メッセージ: 操作ログのロールオーバーが検出されました。 (Operation log roll-over detected.)■ 無効なエラーコード: 13314 実際のエラー: 6714 メッセージ: 収集の反復中にエラーが発生しました。 (Error while collection was iterated.)■ 無効なエラーコード: 13315 実際のエラー: 6715 メッセージ: 操作ログの検証エラーです。 (Operation log verification error.) <p>推奨処置について詳しくは、『NetBackup 状態コードリファレンスガイド』を参照してください。</p>
インポートされた MongoDB バックアップイメージで、NetBackup Web UI の[リストア (Restore)]ボタンが無効になる場合があります。	<p>回避方法:</p> <p>元のバックアップに使用されていたのと同じ NetBackup プライマリサーバーにイメージをインポートする場合は、次のいずれかの方法を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ bprestore コマンドを使用してリストア操作を実行します。■ Web UI の[リストア (Restore)]ボタンが有効になるカタログバックアップをリストアしてから、イメージをリストアします。 <p>最初にバックアップを作成したときと異なる NetBackup プライマリサーバーにイメージをインポートする場合は、bprestore コマンドを使用してリストア操作を実行します。</p>

制限事項	回避方法
<p>代替のシャード MongoDB クラスタでリカバリ操作が失敗します。次のエラーが表示されます。</p> <p>構成パラメータが見つかりません。(Unable to find the configuration parameter.) (6661)</p>	<p>この問題は、リカバリ前チェックで代替クラスタの mongos ポートが mongodb.conf ファイル内に見つからなかったため、代替クラスタリカバリ中に発生します。MongoDB 構成ツールの[更新 (Update)]オプションを使用して代替 MongoDB クラスタの詳細を追加するときに、ツールが mongodb.conf ファイルを作成する方法に原因があつてこの問題が発生します。</p> <p>回避方法:</p> <p>リカバリ処理を開始する前に、mongodb.conf ファイルを更新して、元のクラスタから代替クラスタを独立させます。</p> <p>次に例を示します。</p> <p>既存の mongodb.conf ファイル:</p> <pre>"application_servers": { "original.mongodb.cluster.com:26050": { "alternate_config_server": [{ "hostname:port": "alt.mongodb.cluster.com:26000", "mongos_port": "26001" }], "mongos_port": "26051" } }</pre> <p>更新後の mongodb.conf ファイル (推奨):</p> <pre>"application_servers": { "original.mongodb.cluster.com:26050": { "mongos_port": "26051" }, "alt.mongodb.cluster.com:26000": { "mongos_port": "26001" } }</pre>

制限事項	回避方法
MUI ツールで次のエラーが表示されます。 構成を削除できません。(Unable to delete configuration.)	推奨処置: <ul style="list-style-type: none">■ <hostname-port>.conf ファイルが引き続き /usr/openv/var/global ディレクトリに存在することを確認します。■ tpconfig ログを参照し、次のエラーを確認します: Translate EMM_ERROR_MachineNotExist (2000000) to 88 in the Device Config context. 回避方法: /usr/openv/var/global から <hostname-port>.conf ファイルを手動で削除します。
MongoDB で証明書ベースの認証が有効になっている場合、差分増分バックアップがエラー 6709「コマンドを実行できません。(Unable to run the command.)」で失敗します。	回避方法: エラーコードとコマンドについて詳しくは、mdbserver のログを参照してください。その後、次のいずれかの操作を実行します。 <ul style="list-style-type: none">■ mdbserver ログに mongodump コマンドエラーが示された場合は、MongoDB ホストで mongodump コマンドを手動で実行し、エラーを確認してください。■ mongodump コマンドが X509 証明書関連の接続エラーで失敗した場合は、MongoDB のマニュアルに従い、subjectAltName プロパティを使用して MongoDB サーバー証明書を更新し、これらのエラーを修正します。その後、差分増分バックアップを再実行します。

追加情報

この付録では以下の項目について説明しています。

- [MongoDB のクレデンシャルを追加および更新するための MongoDB 構成ユーティリティのサンプルワークフロー](#)

MongoDB のクレデンシャルを追加および更新するための MongoDB 構成ユーティリティのサンプルワークフロー

MongoDB のクレデンシャルの追加

```
Device Management Configuration Utility
```

- 1) Drive Configuration
- 2) Robot Configuration
- 3) Credentials Configuration
- 4) MongoDB Configuration
- 5) Print Configuration
- 6) Help
- 7) Quit

```
Enter option :4
```

```
MongoDB Application Configuration
```

- 1) Configure MongoDB Application Topology & Credentials
- 2) Configure NetBackup Global Parameters for MongoDB Application
- 3) Quit

```
Enter option :1
```

MongoDB のクレデンシャルを追加および更新するための MongoDB 構成ユーティリティのサンプルワークフロー

```
Configure the MongoDB cluster credentials
```

- 1) ADD Credentials
- 2) UPDATE Credentials
- 3) DELETE Credentials
- 4) Return to previous menu

```
Select the operation :1
```

```
Please select your MongoDB cluster type.
```

- 1) Standalone node
- 2) Sharded Cluster
- 3) Replica set
- 4) Return to main menu

```
Select the type of your MongoDB cluster :3
```

```
Select MongoDB host credentials type
```

- 1) No Auth
- 2) Simple Auth
- 3) Certificate based
- 4) Return to main menu

```
Select the authentication type used in the MongoDB cluster :2
```

```
Configure Replica Set MongoDB Cluster
```

```
Enter the hostname of primary server : host1.fqdn.com
```

```
Enter the mongod port of primary server [On the MongoDB Shell, run  
the
```

```
command "rs.status()" for replica set and "sh.status()" for sharded
```

```
environment] : 28000
```

```
Enter the name of MongoDB host user : root
```

```
Enter the password of MongoDB host user :
```

```
Enter the RSA key of the MongoDB host [On the MongoDB host, run the
```

```
command "cat /etc/ssh/ssh_host_rsa_key.pub | awk '{print $2}' |  
base64
```

```
-d| openssl dgst -sha256 | awk '{print $2}'] : RSA-KEY-OF-THE-HOST
```

```
Enter MongoDB database user : mongodb-shell-login-user
```

```
Enter MongoDB database user password :
```

```
Does this primary server has replicas? (y/n) :y
```

MongoDB のクレデンシャルを追加および更新するための MongoDB 構成ユーティリティのサンプルワークフロー

```

Enter the hostname of secondary server : host2.fqdn.com
Enter the mongod port of secondary server [On the MongoDB Shell, run
the
command "rs.status()" for replica set and "sh.status()" for sharded
environment] : 28001
Enter the name of MongoDB host user : root
Enter the password of MongoDB host user :
Enter the RSA key of the MongoDB host [On the MongoDB host, run the
command "cat /etc/ssh/ssh_host_rsa_key.pub | awk '{print $2}' |
base64
-d| openssl dgst -sha256 | awk '{print $2}'"] : RSA-KEY-OF-THE-HOST
Enter MongoDB database user : mongodb-shell-login-user
Enter MongoDB database user password :

Do you have more secondary servers for this primary server? (y/n) :n

```

クレデンシャルを追加した後、概略が表示されます。

-----REPLICA SET MONGODB CONFIGURATION SUMMARY-----

Primary Server :

```

Server Hostname      : host1.fqdn.com
Server Mongod Port   : 28000
No of Secondary Servers : 1
HostUser: root
HostPassword: *****
AppUserId: mongodb-shell-login-user
AppUserPassword: *****
HostRsaKey: RSA-KEY-OF-THE-HOST

```

Secondary Server number 1:

```

Secondary Server Hostname      : host2.fqdn.com
Secondary Server Mongod Port   : 28001
HostUser: root
HostPassword: *****

```

MongoDB のクレデンシャルを追加および更新するための MongoDB 構成ユーティリティのサンプルワークフロー

```

AppUserId: mongodb-shell-login-user
AppUserPassword: *****
HostRsaKey: RSA-KEY-OF-THE-HOST

```

*****Please make sure to save this entered config and credentials. If you
don't save it now, you will have to enter it again.*****

Do you want to save this cluster configuration and credential info?(y/n) :

Please wait while we save the cluster configuration.

Successfully saved config and credentials for this cluster.

Please use Client name as "host1.fqdn.com-28000" under 'Clients' tab in
mongodb backup policy.

Press any key to return to main menu...

MongoDB のクレデンシャルの更新

Device Management Configuration Utility

- 1) Drive Configuration
- 2) Robot Configuration
- 3) Credentials Configuration
- 4) MongoDB Configuration
- 5) Print Configuration
- 6) Help
- 7) Quit

Enter option :4

MongoDB Application Configuration

- 1) Configure MongoDB Application Topology & Credentials
- 2) Configure NetBackup Global Parameters for MongoDB Application
- 3) Quit

Enter option :1

Configure the MongoDB cluster credentials

- 1) ADD Credentials
- 2) UPDATE Credentials
- 3) DELETE Credentials
- 4) Return to previous menu

Select the operation :2

MongoDB のクレデンシャルを追加および更新するための MongoDB 構成ユーティリティのサンプルワークフロー

```
Please select your MongoDB cluster type.
```

- 1) Standalone node
- 2) Sharded Cluster
- 3) Replica set
- 4) Return to main menu

```
Select the type of your MongoDB cluster :3
```

```
Update replica set MongoDB cluster configuration
```

```
Enter the hostname of primary server : host1.fqdn.com
```

```
Enter the mongod port of primary server [On the MongoDB Shell, run  
the
```

```
command "rs.status()" for replica set and "sh.status()" for  
sharded environment] : 28000
```

```
[Note- similar steps can be followed for deleting creds for cluster]
```

```
--
```

```
Update host1.fqdn.com:28000 replica set MongoDB cluster configuration
```

- 1) Update primary server credentials
- 2) Add secondary server
- 3) Update secondary server config & credentials
- 4) Delete secondary Replica server
- 5) Return to previous menu

```
Enter option: option as applicable
```